



三國七高僧傳圖會

本朝之卷

五

13
605
5





三國七高僧傳圖會本朝之卷末



十二

元曆元年二月七日。攝州一の谷合戦。本三位中將重衡卿源家の為に虜られ
 九郎判官義経の下知おつて。嚴しく武士預られぬ。余後中將重衡の卿ハ
 義経の許へ出家せむと思ひ免ひてんやと宣ひりしが。義経が計ひてハ
 叶山難く。御所へ申して其御左右に依てて。奏聞ありし所。頼朝ハ
 仰合せ候して出家の暇と免んしと治まがたの由仰下されし事。御氣色かく
 とて力及たぬ。中將重りて出家ハ御免なれ。今ハ申に及ぶ。さう。本年來
 相和て侍る上人と請して後世の事も尋聞せよと有れば。上人ハ誰ぞ御座
 ぞと問奉るに。黒谷の法然房と申されり。兼て貴き上人と聞給ひり。と。ハ
 後世の情めと思ひつ。是と免し奉る。三位中將斜らど悦びて。侍臣友時と
 使して。黒谷の庵室へ申されりし。法然上人來りて。對面したまふ

中將をくく言く。重衡の身の身して侍り。時、栄花不誇り、驕楽憍々の心
 ありしをも、當来の昇沈わたり見ると侍らば、運盡せむとて後、此少て
 軍彼ぞ戦ひ人と失ひ身と助んと勵み、悪念へ無間不遑つゝ一分の善心
 曾て起らば、就中南都炎上の事、公へ仕へ世不隨ふ習めて。王命と申
 父命と申し、衆徒の悪行と鎮ん爲ふまうり向ふところ、側らざるは伽藍の
 滅亡及ぶこと力及び、次第なりとて。大將軍と勤や、上、重衡が罪業
 と罷成候ひぬん。其報おや多に一門の中に。我、或一個虜られ、京田舎不耻と曝
 と不附て。一生の所業墓なく拙とて今、おひ合せり。罪業へ須弥より
 と高く、善業へ微塵たりと畜へてらば、借も空しく終るべ、火穴刀の
 苦果曾て疑ふし。出家の暇と申侍もども、責ての罪の深き御免なれば、頂下髪
 剃と宛く出家、小准へ奉り、戒と授り候らば。又斯る罪人の一業とも免る
 へ死と侍らば、一句示る、年来の見参、其詮今不有と宣ひりれば、上人哀し聞

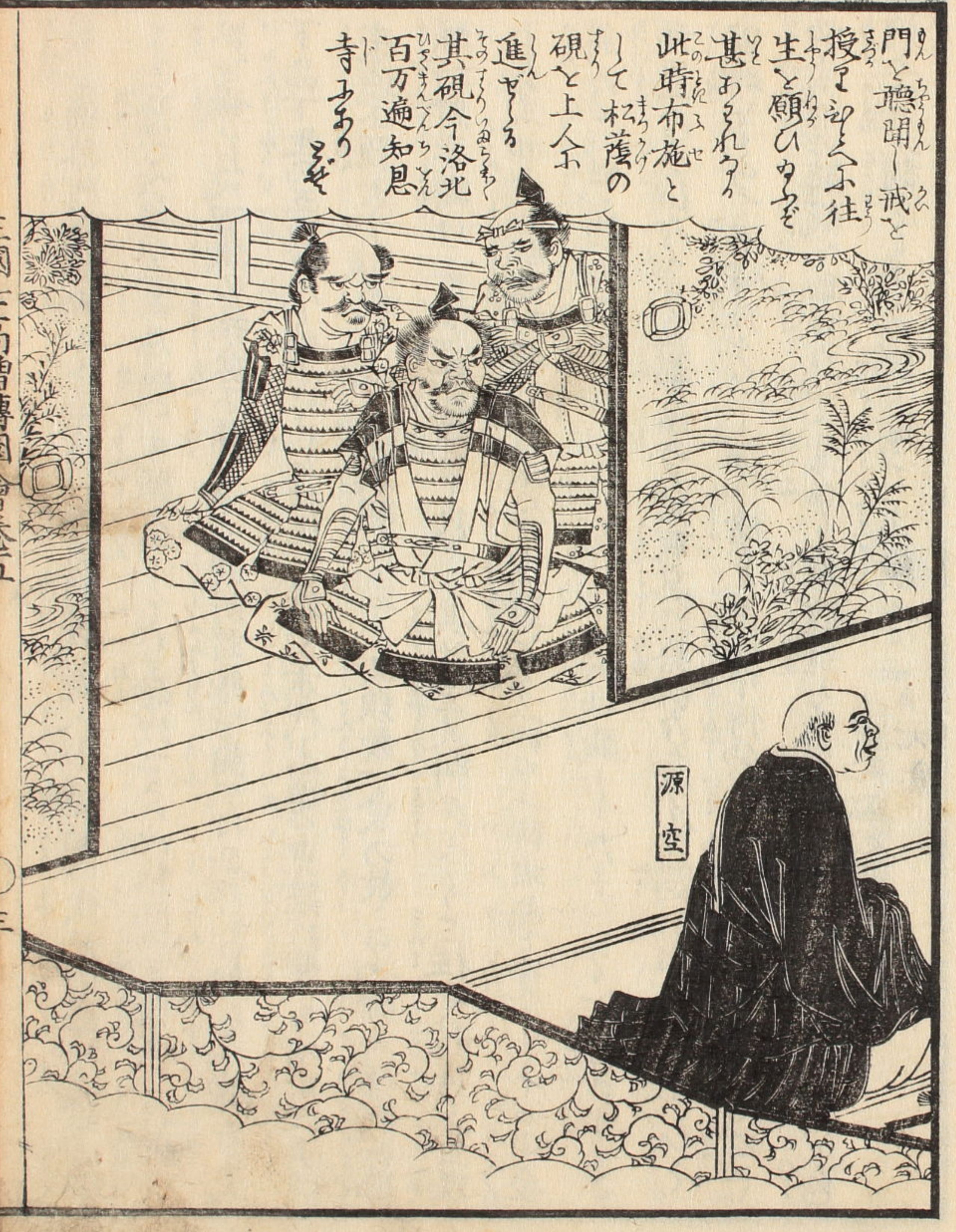
給いて、誠、御一門の御栄花の官職といひ、俸禄と申。傍若無人ふりて見え
 おもえぬや。今斯成の盛者必衰の理、夢幻のごとくあり。されば善ふつと悪
 ありと起し、悦とひし事有べし。電光朝露の無益の所。とも斯ても
 有ぬを。永世の苦とありと、恐ても恐あるべし。事して侍り、受難き人衆の
 生なり。値がら如来の教あり。而るも今、惡逆と犯して、悪心と翻し、善根
 をくして、善心不住して、御座へ三世の諸佛争う、隨喜しぬん。先非と悔て
 後世と恐る。是と懺悔滅罪の功德と名づく。抑淨土十方、諸佛三世、出
 づと、罪惡不善の凡夫、入事實不が。彌陀の本願念佛の一行、かりこそ貴侍れ
 土と九品、よめて破戒闍提と嫌ふことなく。行と六字、よめて愚痴暗鈍も唱る
 不使あり。一念十念と正業とあり。十惡五逆と廻心と、れば往生と見えたり。
 念々、称名常懺悔と宣て、念々、毎、佛名と称れば、無始の罪障とくく消
 滅せし。一聲、称念罪皆除と擇し、一聲、弥陀と唱ふと、過現の罪も除る

志げしき重衝源空上人と
重衝卿源空上人と
請て戒と授り
る

みして宗盛知盛寺の
舎第あり元暦元年
一の谷の合戦お生田比
副將軍たりしが
軍破して虜と
なすひ都ふのち
ゆふ折り上人と
請て浄土の法



門と聽聞戒と
授りしと下往
生と願ひのちを
甚あられん
此時布施と
して松蔭の
硯と上人不
進
其硯今洛北
百万遍知息
寺あり



故小南無阿弥陀佛とす。一念の間に能八十億劫の生死の罪を滅す。憑
ても憑むべし。五劫思惟の本願念じても念ひて。此弥陀の名號より行住坐
臥を嫌はぬ。四儀の称念煩ひなく。時所諸縁を論せぬ。散乱の衆生を據あま
下品下生の五逆の人と稱して己に往生と遂ぐ。末代末世の重罪の輩も唱まば必
末迎ふ預まへ。是と他力の本願と名く。又頓教一乘の教なり。浄土の法門弥陀
願巧肝要斯のよしと善知識せられ。其後上人判りて。三位中将の頂小三度
あてり。初小三皈戒と授け。後小十重禁と説く。御布施と覺りて。只小金
時たる双紙箱一合差置給へ。此箱は中将の秘藏したまひ。侍のり。小
預置たす。たり。都落のとれ取忘れ給ひたり。思ひ出さず。いと。
友時とて召寄たまひ。り。諸と三位中将。今の知識の授戒の縁と以て。
必末世の解脱と助け。と宣ひ。敢て泣く。上人の衣の袖に雙紙箱と包
何と言ふ詞とて。涙不咽て出給と云。源平盛衰記大意

元暦元年三月十日日本三位中将重衡卿。兵衛佐源頼朝申請り。依て梶原平
三景時相具。関東。下向あり。同廿六日鎌倉。入廿七日兵衛佐殿重衡卿。小
對面あり。介後翌年又京都へ皈。南都の衆徒の願。任せ。山城國木津の
邊の卍堂。おいて誅せ。六月。今に是と哀堂と号けり。衆徒等首
と申請て法華寺の鳥居前。於て竿に貫き。高く捧げて。是とす。次。
去る治兼の合戦。南都と亡。伽藍と焼失あり。怨と報。次。ありと云。
一説。小重衡卿。源空上人の布施として。松蔭硯と鏡一面と進ぜり。此
鏡と結縁の爲とて。俊兼房重源の方へ送つ。これ。大佛と鑄奉る。
爐の中へ入ら。飛出て。竟。溶化。故。大佛殿正面の柱。打付
たり。是と。又松永の兵火。罹。焼失。言傳ふ。
文治元年八月廿八日。盧舍那佛の大像成就。元の如く。小磨き。奉り。
開眼供養あり。後白河法皇。南都。御幸。源平盛衰記。見。

元曆元年三月十五日権亮三位中将平維盛の讃岐國屋嶋の館と忍び出與三兵衛尉重景石童丸といふ童船ふ心得た武里とて舎人此三人と具りりし紀伊國由良の湊ふ渡りし是より陸上へ杉川寺ふ参詣り折り此間より源空上人此地ふ下りて念門法門の談議ありり。維盛かくと聞かひ與三兵衛重景を招き態とも都より源空上人ふ逢奉り。後世のことも尋聞べたふこをあれども道狭き身うれば力か。上人たまく此寺ふ在候幸あれ悼まあれども見参し奉りて思えり如何あらんとのまへ。重景畏つて何の慎ら候べき。上人といふ生少の佛と承る。然るに善知識ふこれ。後世菩提の御爲ふ御聽聞あん折りて縦災害ふあせりてと痛思召べく。闘諍合戦の場ありて身と失いて修羅の悪所ふと生候たりと。此は聞法隨喜の窓ふて命と亡す事あり。弥陀の淨刹ふ往生せんと思ひて。小賢く申はれ然るべと。夜ふ入て重景と御使あて源空上人へ申されり。維盛高野参詣の志し

あり屋嶋の館と忍び出。これ逆罷り侍るが折り上人此所ふ在りて出離の法門一々兼たさく。仰遣まされれば上人哀と思ひて。驢々維盛卿を請り入奉り。見参りて實ふありか。とて思ひ奉り。御身都と出候て後人々愛か。とて亡ひ給ふと兼るふ付て。如何をせめけん。とて思ひ奉り。小再見参ふ入奉り。哀ふ悦入侍り。儲とて。この世の乱の中おけが。高野参詣の御志。愛度と思召五給ふ事あり。法たす。維盛のなすひり。家門の榮華とて。ふふ極とて。先帝とて。一族悉く西海ふ路下り。上人。人々も。ふ憧れ出侍り。憂も。多。中。難波。河。の。谷。ふ。て。卿。上。雲。客。屢。亡。び。の。適。討。の。者。も。世。有。空。侍。り。夜。終。夜。今。や。水。の。底。沈。じ。と。難。き。昼。終。日。今。敵。不。失。と。悲。じ。も。角。も。静。心。し。され。遂。ふ。適。り。ま。た。者。也。不。貴。き。結。戒。の。地。と。兼。て。高。野。あ。ま。り。出。家。と。げ。其。後。い。ふ。も。成。命。と。思。ひ。侍。り。て。屋。嶋。と。出。て。是。ま。て。奉。り。不。圖。見。え。奉。り。と。い。ふ。

りれども其夜の菴室に留りての法口説て物語りけり。曉がくも維盛少くも
 身と放るる日毎に讀誦し御經あり。水の底も沈み人時へ同く沈奉る
 事罪なく覺え候ふ。若世ふりて身と聞なまらん時へおりの出して后世吊ひ
 と宣ひてことと進ぜり。源空上人請ひて。たとい之をくそ争う忘奉る
 ざるんれども。斯思召入く兼る。披見ん折々の必吊ひ奉るべし。拜見
 一わへ四半の小双紙に金泥して書小字の法華經なり。最良を思
 り。維盛卿は今日もすうて石残を惜み侍せども。維盛と平家の
 嫡々として頼朝と相尋りて披露あり。世の人口と憚る。戒と持暇
 申さるやと宣へ。上人。此間説く戒のほどと聽聞あまかきと存せられも
 御急ごと兼る。戒と授け奉るべし。圓頓無作の大戒梵網の十二重禁
 々と説く。上人結して曰。塔中の釈迦の此法と説きて佛位十界の衆生に授
 臺上の舍那の此戒とけり。正覺と華藏世尊に唱ふ。法華一實の妙戒に

能持の一言に戒珠と胸の間小研む。合掌の十指に十界と實際に安んじ衆
 生正覺の直道即身成佛の要路なり。是則ち薄地底下の凡夫の一毫の善なり。罪
 惡生疾の衆生の出離の期に。輩修行覺道に入む。と速に佛果と成む。計。
 此戒を知る。之も仍て梵網經あり。一切有心者。皆應振佛戒。衆生受佛戒。即入諸佛位。
 位同大覺位。真是諸佛子。一度受此戒者。入諸佛位。同大覺位。と説く。誠難有
 功德あり。戒師の戒と授る。授戒灌頂とて。佛前の智水と後佛に授る。意なり。此戒
 と受る。即身正覺と唱る。故に此戒と得る。永く不矢の戒とて。一度うけて
 後永く矢くことと宣ひり。維盛も聽衆とて。隨喜の涙を流しり。其後念佛の法門。弥陀の本願。と説く。さあ。教化せよ。と云はれ。維盛ハ
 あり。善知識あり。奉りて。法を立出さし。契あり。後生に必し。奉り
 會と宣ひ。夫より高野に参り。上人も哀れ。おののけ。遙に見送り。奉り
 袖とけり。たまへ。見る人。袂をちり。り。とて。維盛ハ小松内大臣重盛の子息なり

壽永元曆の間源平の乱ありて命と都鄙小失あり其數と云ふは茲に
 俊兼房重源無縁の慈悲とされ後世の苦と救ふなり興福寺東
 大寺より始めて道俗の貴賤と勸め七日の大念佛と修り其項までハ
 世人のまご念佛のいみじくと知れり勸めよ叶ふのめりければ俊兼房此事
 と歎きて人の信と勸り公為大佛殿のまご半作せりる應間小唐より渡
 奉る浄土の曼陀羅をび五祖の真影とけ供養し奉らん為源空大
 と南都へ招請して導師とと上人領掌しり

五祖の真影とて震旦の法門と述る師多しとて源空
 上人唐宋二代の高僧傳の中より曼巒道綽善導懷感少庸の五師を
 抜奉り一宗の相承とまじり介後俊兼房重源入唐の時源空仰られ
 曰く唐より五祖の影像あり必は是を得く帰朝ありとこれより重源渡
 唐して後普く尋常りふ上人の仰ふ遠く果而五祖一幅小画る影像と

得たり重源より上人の鑑と遠くありとある彼大和國當麻寺の曼陀羅
 弥陀如来化尼とありて大炊帝の御宇天平宝字七年小織ありあり
 靈像あり序正三方の縁のさひ日觀三障の雲の光景人々辨
 一其後文德帝の御宇天安二年小唐より渡り善導大師の御
 叙の觀經の疏の文を見て如く人不審とて天平宝字七年より天安
 二年に至りて其あつた九十六年あり往昔和朝を織りける曼陀羅の
 遙の後小渡り觀經の疏の文小合ると不思議とて言傳ぬ今上人先
 かつ浄土の宗義とひたひ後小重源入唐のまご彼影像と渡りて
 と命を得て取るまごの影像上人の仰ふ遠くありと豈奇特ありや
 され八道俗貴賤の五祖の真影と拜して上人の徳を歸し倍念佛増長
 あり當時嵯峨二尊院經藏小安置とて彼重源將來の真影あり
 源空上人既小御約束の日小ありれば上人御弟子十四人と召具しめて入御あり

上人の思召ふの御通世の御姿あて御供養あてとて一かりと門下一統不奇義
ありて申りたる其義有べしと本朝無双の大伽藍あり遁世隱居の事ハ各別
の義あり是ハ大法會諸佛菩薩の御影向の場あり争ふ不法不義とては
らん事人の嘲有べしと法會の具足と上人を送り奉る上人力を當寺
むかしとて仰せらる時所の衆議とて從僧大童子中童子力者人ユあ至る
まで皆々南都の經管あり庭前小幢とて佛檀華机天蓋寶散玉珠の華
鬘高座禮盤錫杖香爐香宮念數散華華籠新調羨麗あり招請の
僧三十口山仕の躰ハ羅漢ふと導師の躰ハ瑗玲細軟の法服ハ九條の香
の袈裟威儀釋尊のまゝ一寅の一天の乱聲一辰の刻集會耳目と驚驚一幡
蓋風不翻一自在天の粧ひとつ一沈香砌小薰とて海紫岸の白ひ小類し
持金剛僧の振舞ハ法界宮の侍後ふ似たり珠幡七寶とて寶螺六端
とありは凡堂内の飾と供具の躰言語道断なり饒鉢虛空小響きて

貴賤移つと覺えび梵明空を穿く伽陀妙ときとら大阿闍梨の法義ハ
實ハ智處城の教主と疑ふれ三皈發願の音聲ハ舍衛の金言とあはは
る當ふ今此曼陀羅と解説とる物とて四分あり一ハ勸發大衆用心
分二ハ縁起因縁生信分三ハ正說曼陀羅法門分四ハ廻向法界往生分
是より始りて弥陀觀音願主の深信と鑑とて淨土の變相の曼陀羅
と織ありと人多く生信と賜とて正說曼陀羅法門分とるハ右の縁
觀經の序分義卷の第二一代の法門を始りて厭離穢土欣求淨土の旨禁父
禁母の往生歷々あり尤の縁ハ觀經正宗分卷の第三ふあくる三昧正受の義
小趣き若男若女の觀門明々あり下の縁ハ正宗分上中下品の來迎華臺
宛然とて憑あり中臺と仰けハ四十八願莊嚴淨土の義式弥陀の苦迹
あり惣じて三方の縁ハ釋迦撥遣の恩德肝小銘を弥陀如來願力所成の莊
嚴觀音勢至諸菩薩九品蓮臺清淨大海衆嚴重殊勝より九定善十

三觀ハ觀每小念佛小飯一散善九品ハ品每小往生と云旨五箇日の間
御讚嘆ありけんハ聽聞の徒耳と驚一肝小銘一涙おさくハ故小偏執の
族と邪見と捨て无生ふやう忽小三祇の功德と満一正小五智の果位小
登る。然れハ三賢十地の大士四禪六欲の天衆も悉く侍衛と。生前ハ
所願も満足と心地らう。凡貴賤袖をちわり衆徒袂を潤りと。慢心争いと
失い。伽藍と實小動とわうと。身の毛弥きと覺くや。扱次の日より同五
祖の眞影と供養や。凡三國傳來の血脉釋尊身属の相承あく本宗と
閣さ深く浄土の眞門小結成せら日と述り。惣ト前後七日の間御説法の
音聲解脱の躰大師の舊儀とうは富樓那と學びり。偏執の諸宗と捨
劣の義と忘と法相至極の習學者と我慢の旗針ととまて上代中頂
うりの碩徳大智不思議の法門き及ぶる由と褒美して退散一々
尔後難波奈良の伶人舞樂の祕事ときま新羅高麗の曲と及上下

くれと折角と見物と扱上人御飯浴ありと由の御出あり茲小俊乘房
重源才のりて言されりハ諸も此大佛と造一奉了同御堂建支斯の如し凡日本
一の大善根と存小復了此間の御説法小遂小御意小掛られハ修ふつらハ功
徳とつと御讚嘆候りハ御供艱ハ各別のとて修へも。當伽藍と称揚
候とて存小候へハ余所外の事とも候り。何さの御意とて候やん
定りて経論所釋の文等修やんと言と。上人仰られりハ此大善根ハ日出
度殊勝とぞ思ひやうと御迎のたふハ斯と修福造営ハ大苦惱とて見
えられ日本のとふハ唐までの勸進ハ苦惱とて今也。此功德念佛二三及
ハハ考るぞと見えらうと云々此事やがて風聞ありて興福寺小聞え一ハ。兩
門路の衆徒會合とて楮とて此法然身。此間の法門等ハ類ひりて字也
大智者と聞れん。是ハ心小大偏執と持たるとはらうとて。即時小大鐘と鳴し
衆會して食議まらうと一僧進出言りハ。當伽藍ハ是聖武天皇の御



願行基菩薩文珠の化身として建立しつゝ然れば婆羅門僧正ハ南浮第一と
供養しつゝ斯るやんそめり大伽藍と念佛二三遍の功力よりおとせられ
偏執のいふ處あつたれば速に耻辱とあつて追下しつゝ者とも時追々
與力同心の惡僧七百餘人雲霞のごとく集つて茲に覺範僧都の曰く當
寺いん法相唯識のころ大乗習學のみぞん也。後ハ經釋明文ありつゝ
其憚り。斯の如き過言ふ及ぶは是佛意と神慮も遠ふべき者なり。
そや押寄て追拂ふべきもの也と。此中よと定範僧都つゝ言ハるそ
百々の會議ありつゝ。如此の經論所釈の證文歷然たる争う種々の汝法
不及ぶ。夫ハ學通義あつべ。法然房も定りて證據ありん先子細と相
尋りて其返答ふべき者やと。これ依く。老若も大略學通達も
あつて定範の義も同じて尤も。若不思議の文證ありん其ハ無道の
強議も。學通の所存ありん一同て源空工人の宿房へ寄たりれば

上人の御發駕と聞えし衆徒は急し遁ぎて。般若寺の前まで追げし。
定範法然の乗つて輿のまふはつと支寄。輿の轆とひつと推つて動さず。
當伽藍造主の功德ハ念佛二三返ふ者なり。私の語つたその經文ありやと
其時源空の御弟子等ハ心中ハ驚き。今度南都へ入御ハ如何候べきと申
しつゝ入御ありて斯の珍事ハ口惜きとて各色と變べ。七百餘
人の衆徒其外偏執のものも。汝手とつゝあつた法門つゝ聊も謬
あつた。耻辱とあつんと腕とさつて見えたり。上人ハ憚りて手つゝ
定範が言とてさるふ。華嚴經と引く見た手と答へなす。定範もさる者
あつて華嚴經ハ廣本あり。つぎの巻つぎの品も侍らんと。工人佛地品を引
見つて仰せらるる。工人の御下と押つて華嚴經とさる遣しつゝ
時とつゝ經とさる。定範經とさる。工人其經とたびなす
文ハ賤のそ。各ハ左右見附たり。侍手もさる。佛地品と

卷下也。是見大士と仰れば。老僧四五人立りて。見とバ十丈金色像六万五千躰。十度造供粮不知称弥陀と見えり。上人宜る。又妙塔勝心經と取らせり。引て見せ奉る。南无阿弥陀佛一念功德勝於一百三十五恒河沙。成満金塔者と云。此余經釋論勝て計ふるべ。當伽藍一佛一精舍一度造まの供粮なり。此等の經文の如く莫大の金像供養をば。念佛三返の功德よ者なり。源空が私の會釋す。明文の如く八只一返の功德も者なり。とを勸められ。實も斯る大乘經等の文と破りて言。バカをくとも仰せり。定範よく佛を平等たり。十力四无為良内證外用の功德皆りく等し。何よりて弥陀と念むる功德。諸佛の善根小勝せり。やと云。上人宣す。彌陀因位の執行別なり。誓願別なり。成佛別なり。故に三世の諸佛を超えり。其日の辰の上刻より終日の問答あり。上人の御返答條々勝れぬ。且浄土の法門弥陀の名号諸教ふと云。三世の諸佛の功德善根小秀

十五

肝心と仰せられ。各学面して皆々帰伏し奉りたり。
此條一書ハ建久二年のものと云明義抄ハ正治二年四月とあり梅谷ハ正治二年ハ大佛供粮の五年後なり。又ハ文治二年の誤なり。予ハ大原問答と同年なり。被宗論の以前なり。
 文治四年の春の頃。明遍僧都の夢。想と御覺する。其有る。白檮州荒。陵山四天王寺。ふりて西門と云。眼きて見たり。非人乞丐。其外病者。人ぞ許多。臥たり。省病人と又多くありて。或の飯あり。ハ粟柿梨。亦を病者。小とふる。小少く受る者。とあり。病者多。ハ年とかり。茲に省病人の中。小實。小慈悲。ふらげ。る僧ありて。米飲とまり。病者。小進りて。通る。手ハカ。づ。ける病者。と。大切。み。る。皆。此。米。飲。と。受。く。飲。と。見。た。ま。い。夢。心。地。不。信。お。も。ひ。の。中。粟。柿。梨。と。与。へ。る。小。大。事。なる病者。ハ。一口。小。喰。む。と。見。たり。斯る堅死菓物の華嚴天台等の法門あり。今ハ大事なる病者。ハ。極惡。最下。の衆生なり。され。バ。法。ハ。難。行。なり。衆生の機。分。ハ。者。なり。機。法。あり。相。叶。ぬ。致。然る。小。慈。悲。深。げ。る。僧。省。病。の。為。小。米。飲。と。与。り。通。ら。れ。る。小。元。氣。有。病。者。も。

妻(勞)まゝ一切の病者に皆々受て飲し見ゆり彌陀の本願あり。慈悲深き僧ハ
善知識あり南無阿彌陀佛の名号ハ人の米飲するべし。機法相應して生灰を
離るる瑞相と。六方恒沙の諸佛のてして見せしめんと思ひ合せて。此由と源空
上人へ妻へ書く進も。是中へ上人の御勸化の殊勝なる故と。益飯伏し
信心深りしと。最尊なりし

同五年の春のころ源空御弟子小十余人召具して蓮臺野毎岳山 小御出有て
言ふ。源空兩三年前小聊夢にあり。夢の實否とまづ事なりと。
少く高さ塚の上のなるの四向を見せし有り。髑髏と彼是と取あつと
て塚小築。行道して阿彌陀經數返ると人吊いたまひ

皮少とそ男女のちとあま。骨のつらる人形とれし
と詠ひて暫く首とをわたり百四五十あり。其中小大なる髑髏より血の
涙と流りたり。御弟子小十とて。余の不思議とされい如何なる人の髑髏と

候らんと申し。源空とつとまづ。先くと火葬せし件の髑髏と焼し
め名号と書して五帰あり。御弟子等小語あり。源空は。叡山小有し
時同学の僧小三位註記祐尊とつと者あり。然る小或時京師小趣き。二三日
彼をありて一夜失りて尋ねし。其往去と知らべ次の年人の風聞し。つと
人小殺害せし亡骸ハ蓮臺野小捨ちし。聞し。是と一族とハ知らば。つと
空へ犬野子小荒され果たり。源空は夢小見えて曰く。我過去の宿習ありて
人小殺害せしと。空へ野外のまづ。日頃の同学の好吊りして。候へ
首ハ野原小有たり。天台の習学ありて。得道せし。候へて涙と流して
告ぐ。吾と夢にあり。涙とを。必と吊い奉る。心易くあり。つと
答へ。數とあり。ゆり。の後も尚涙を流せり。されば。彼祐尊が
首を。と言ひ。上人其夜の夢小祐尊来り。御と。ひあつ。心
小天上と。見ゆ。殊勝なり。御と。

同年修明門院ふく女院にん源空上人げんくうと召めされ七箇日の間御説戒ごせいかいあり南岳大師なんがく天台たいがい傳でんるり戒品かいひんあり又慈覺大師じがく五臺山ごたいざんより文珠ぶんしゆの即身じやくしん不ふ值ぢ奉ほうて御相傳ごさうでんあり三種さんしゆの淨戒じやうがい虚空こくうより傳でんるり戒かいあり此三種さんしゆ淨戒じやうがいといふ一ひとふい有あ情遠じやうえん益戒えきがい二ふたふ勝しょう善ぜん法ぽう戒がい三さんふ勝しょう律りつ義ぎ戒がいなり此三種さんしゆの戒かい行ぎやう七日ななひ御讚嘆ごさんたんあり第五日ごごひふあある朝あした御説戒ごせいかい始はじりり香かう爐ろ火ひありて西三日さいさんびつ消きえびこのけりけりふああるる男おとこ七なな人にん女によ五ご人にん都合ごうご十二人じふににん臨終りんじゆうすて異い香かう薰くんじて失うせととりり女院にん上人じゆうじんの御目ごめ六む十四じゆ五ごよりより天童てんどう香かう爐ろ火ひと置おけけ修明院しゆめいの御前ごまへより勢せい至し菩薩ぼさつ大乘だいじやう戒がい七日ななひ御讚嘆ごさんたんの結縁けつえんふ梅うめ檀だんと焚たくく切利せつり天てん登のぼると言まじじて天てんとと登のぼると見みるる余よの人ひと々の目め六む雀さく飛と昇のぼると見みるる又また説まじじ戒かい結願けつがんのよよに菽しやく垣げんの元もとより免めんととび出でく垣げんの上うへより昇のぼり高たかく飛とりて落おちち石いし子この頭かぶととちちて免めんの口くちより髮げん半はんあり童子どうし天てんととちちて昇のぼり

おんぬ又また畜生ちくじやうをを不惜ふし身命しんめいの志し深ふかくくて忽たちちち畜業ちくごうと免めんれるをを不思議ふしぎありし事ことどもども唐たうよりより階かい唐たう二代にだいの國士こくし大極だいごく殿でんよりより仁王にわう般若ぼんげ若じやくと講かうじりり今いまハ法ぽう然ぜん上人じゆうじん清涼じやうりやう殿でんよりより御説戒ごせいかいあり同女院どうにん不ふ架け装さうと授まけけ奉ほうてて唐たうの安あん然ぜん和わ尚じやうの戒品かいひん傳でんへへひひをを袈け装さうの授まけけられる古今ここんふふ双さうよりより大德だいとくるるがが弥み和尚じやうじやう上人じゆうじんの位ゐたたくく尊たうききとと言まじじととりりちちるるひひ完かんふふ河内かふち國こくの住人ぢゆうじん天野あまの四し郎らうよりより悪黨あくだうの張本ちやうほんあり此者こゝろ人ひとの有う徳とくををとと聞きてて夜討よちうををちちて財室さいしつをを奪うひひ山賊さんさくをを海賊かいさくをを働はたらかかるる人ひと異い名なととて耳みみ四し郎らうと名なづくく一時ひととき徒弟とだて信空しんくうの宿所しゆくじよ姉あね小路こみち白河しろがは二階にかいの房ぼう源空げんくう上人じゆうじんと招請しやうせい申まされるるる其折そのせ節せつ耳みみ四し郎らう都みやこふふよりより在あるる所ところとと窺あららひひ歩ありりがが便べんににあありりせせ二階にかいの坊ぼうへ潜ひそみみ入いりり椽えんの下したにに蟄しりりて人ひと静しづままるる財室さいしつと掠らぶぶと時ときの移うつりりと待居まちりり上人じゆうじん常じやうの御事ごじををれれ出離しゆぢりの要道やうだう娑婆しやばの有う為ゐ無常むじやう轉てん變へんの所ところと常住じやうぢゆうと思おもひひ入いるる無む墓ぼとと極樂ごくらく魚い為ゐの不退ふたいの快樂けつらくと期きををととたたと弥み陀た本願ほんがんの念ねん

佛ふまごぶざる道理と説き。なほく人東ふ生さるる。悪人ともう程なく三悪道ふ
 かつて。无量永劫苦しむと受んと悲しむとや。慙あ夜三更ふ及ぶまで御法
 諍ありしが。天野様の下よりて具ふ聴聞せし程ふ何とてを打さるれ。嗚呼我
 いうるいどや。拙きもの我より外よりありし。抑四方の人々ハ皆貴きも賤きも。
 必後世と願ふよりふ。我いづるふ此身と親んて種々無量の罪とつる。これ
 浅ましきと思ひ悔きて嘆きしが。夜も既ふ明もつる。椽の下より徐々と
 這出つ上人の御前ふ平伏し我身の所業の悪死とら。此房の椽の下ふ昨
 夜より忍入る窺ふ折ふ。上人の御法門と兼て先非と悔み年来の罪業と歎
 きて罷出候と涙とが。懺悔しれば上人打らるる。實ふ神妙ふ思切ら。
 縦い日来悪業と犯したるも。今日よりして徧ふ念佛せし悪人撰取の本願
 すれば何る捨たす。之を必と決定往生とぞと。種々御法門と説きせし
 りいられ。夫より四即の无極の適世者ともうて少の罪も犯さば。愛度るも道心

かり。然るふ年来日頃く。と含む敵も多うり。四即が発心とて聞て討も
 搦りせしめて有る。四即の昔ふ引く腰刀が指を有れば人々棄ての遺
 恨と捨て許さる。時ふ丹波國の住人篠村新左衛門範長とて者あつて此を京
 師ふ滞留して在る。三も色前ふ頼も。一族と彼天野が為ふ討さる。何も
 して此本意とてげとやと思込る。故なら四即道心者ともうて許さる。あふ
 して謀畧とつて四即と我家ふ賺し招き。只管酒と勧め。天野えより上戸
 たりゆ。勸りふ隨ひ數杯と傾け。終ふ酔卧して前後とて人静る。後範長
 刀とめりして宵ふ着せらる衣引のけ袖と刀と指まん。子。熟酔し。四即が
 息の音とまけ念佛の声り。恠くおひ紙燭とて。之と見ると阿弥陀如来の
 御姿と幻のよみて。不思議ふおひて聲とて。驚く。能く。元
 四即より時ふ範長刀と投とて。難有や斯る悪人も。堅固の同心と起せば
 かくのぞと尊と身ともう。我争うとて殺さんとて。念発心して。たがふ古の

敵の意と懺悔して同道心者となりて頗て髻をきり四郎は法名と教西となり。範長の善教となり。是偏上人の御法門の奇特なり。

一書云河内國天野四郎とて強盜の張本なり者あり人となり一實と掠を業として世と渡りて年長く後上人の教よつて出家して教阿弥陀佛と名づけり。相模國川村とて地を下りて住りて後大往生とていへり。

十八

建久元年二月上旬。源空上人宜旨やうと院参りて折う。仙洞法皇の御所。ふの高僧五六人参りて一人は無動寺の僧正寛圓一人は仁和寺の僧正淨範一人。石山の上人專祐一人は横川の僧正眞範一人は大乗院の僧正祐範なり。法皇これ僧侶と御敷覧りて宜ひる。今日法然上人と初て方々参りて神妙ふ侍れり。やう聖道浄土の法門出離の肝要と説けり。朕よりい聞し召るべし。坂河殿兼つて仰せり。尚某と御勅實ふ僥倖と存じ候ふ。尤敷慮ふ相叶ひたまへ候を仰る。于時無動寺の僧正申りて何事の肝要を申侍る。去る文治の頃

頭眞の催促よりて隨分の碩徳達大原五禪寺より宗論の問答。大略念佛往生決定と落居候ふ。諸宗の對判のいやふ候ひり。不審ふ存候ふ。大乗院の僧正言りて召あつて今日同心子御参内稀なり。御参會さし。いふ覺候ふ君の御勅の。尤聖道浄土の法談申兼り。云々石山の僧正實ふ大原の問答の。法門本朝ふ候。あれども君の御前みて定説り。佛教多門なれども皈佛ハ又一佛なり。无動寺横河の歸法の天台なり。大乗院の歸法ハ又法相なり。仁和寺の皈法ハ華嚴なり。愚僧又眞言なり。法然上人ハ天台法相華嚴三論眞言九宗の兼学至極の法もと捨て無相傳の念佛と見。日ごろ誓古の修学。往生極樂の法は思ひつ。偏ふ称名念佛。惟も八宗九宗ハ無縁。念佛の一法ハ有縁なり。抑愚老今日本朝無双と披露ある法然上人ハ值奉。不審一を申。上人の御意と殊ふ蒙り候。一印一眞言證道詣路と

院中於諸
宗の碩徳難易
二道の法門を
談ど

天子位と道れんと
仙洞と其言と奉
文と詔ると院
宣と行啓と御幸
上皇仙院
と稱ど
御所と院の
仙洞御所
より申奉る



仙洞飾と
落させわす
法皇と稱ど
五十九代
宇多天皇
昌泰二年落
飾の法名
金剛覺と
曰これ
後白河法皇
法皇の
後白河法皇の
七十七代の帝王



一の息まを嘘の一字と胸持て、即身の如来なり。此息と鼻へ出せば、兩部乃
 大日虚空に現れ、嘘の一字と古の先ふか、諸尊空中に満り。あれは經の嘘
 字三密即此法身遍照毘盧遮那得大惣持門と云。道理と御覺語あり
 ち、念佛も、念ふと云ふは、最不審に、佛の心底のまば、養ふと云ふ
 佛、つと、上人答て曰く、源空と御前の問答さつ、いふ罷存に、佛よ、そのまば、
 君の無上法皇の御名とか、せ給つて、其御前より、聖道淨土の真偽と決せん、と
 傍りて、潜ふ説ふ、まば、當座して、難易の二道と治定と、一、秘密神呪經
 小の、一、言語、皆是、彌陀、所説、思量、濃、謨、兩字、秘密藏經、小云、三世諸佛、出世
 本懷、阿彌陀佛、名号、爲説、大師の御擇、小、真言行者、於南元阿彌陀佛
 名号、更勿、作淺略思、若入真言門、諸言語、皆是、真言、何、况阿彌陀、と云
 又、念、念佛者、十、甘露、真言、一代、聖教、結經、八、法藏、妙、肝心、出離、生死
 最要法、彌陀來迎、得往生、と云。ソ、名号、と云ふは、真言、あり、と云

十九

又、真言、と云ふは、名号、と云。真言門、より、修行、より、修行、の難行
 道と判、なす、と云。面々の、この、の、智者、は、も、佛、も、ん、ん、夫、と、時、機
 如何、ふ、と、鈍根、無智、極惡、最下、の、徒、に、真言、止觀、の、修行、小
 淨土、易行、小結、成、と云。各、不審、と云、と、區、と云、と、終、小
 同年の春三月七日、顯真法印、と云。天台の座主、小補、と云。固く
 辭退、の、勅使、大原、よ、宣命、と云、と、座主、職、と授、けられ、終、小
 召出、され、所謂、末代、の高僧、本山、の、賢哲、より、同五月廿四日、小最勝、講、の
 證義、と勤、同廿八日、權僧正、小住、と云。山、と治、め、つ、と、三年、の、あ、小内、論、義、二、度
 寂光、大師、の、御廟、の、番論、義、傳教、大師、の、御廟、の、淨土、院、の、番論、義、と、執行
 小、昔、山、の、佛法、の、絶、た、と、つ、瘞、れ、と、起、され、も、佛、の、尚、祢、名、の、行、息
 小、法華、堂、の、初夜、の、行法、と、高聲、念佛、千返、と、加、修行、せ、ま、其、行

今一々退轉（一）時小日來の腫物の病著（二）少々發（三）淨土院の番論義の夜建
 久三年十月十四日寅の刻（四）東塔圓融房（五）正念違（六）念佛相續（七）
 往生の望（八）遂（九）遺言の旨（十）則（十一）大原（十二）送（十三）奉（十四）敷山の名僧（十五）
 之（十六）源空上人の教（十七）往生の道（十八）思（十九）定（二十）心（二十一）誰（二十二）其跡（二十三）
 希（二十四）諸宗の碩学（二十五）卒（二十六）源空（二十七）飯（二十八）一天四海併（二十九）
 て念佛（三十）號（三十一）源空普（三十二）智惠第一の名（三十三）得（三十四）
 建久三年靈山寺（三十五）三十七日不斷念佛（三十六）のあ（三十七）燈明（三十八）光明（三十九）
 て四面赫（四十）五日の夜（四十一）行道（四十二）勢（四十三）菩薩（四十四）同列（四十五）給（四十六）
 或人夢（四十七）源空（四十八）返（四十九）奇異（五十）此（五十一）三十七日不斷念
 佛の時衆（五十二）都（五十三）十二（五十四）法蓮房（五十五）正觀房（五十六）定蓮房（五十七）藏人（五十八）入道（五十九）蓮房（六十）安樂坊
 蓮光坊（六十一）西仙房（六十二）清淨房（六十三）念佛房（六十四）蓮乘房（六十五）阿證房（六十六）其先達（六十七）源空上人（六十八）右十二人

三番（一）守（二）勤行（三）三十七日（四）亡（五）の時（六）異香室の中（七）満（八）音樂身（九）
 聞（十）聽聞の人々（十一）四十八の燈（十二）見る（十三）三十七日（十四）亡（十五）の時（十六）阿弥陀如来出現（十七）雨時
 源空上人（十八）の口（十九）光（二十）放（二十一）見（二十二）住蓮房（二十三）安樂房（二十四）西仙房（二十五）法蓮房
 清淨房等（二十六）唐（二十七）善導（二十八）和尚（二十九）口（三十）化佛（三十一）と現（三十二）此上人（三十三）の口（三十四）光
 明（三十五）と出（三十六）末代念佛の祖師（三十七）誰（三十八）敢（三十九）背（四十）人（四十一）哉（四十二）首楞嚴經（四十三）の勢
 至章（四十四）云（四十五）我本（四十六）因地（四十七）念佛（四十八）の心（四十九）と（五十）無生忍（五十一）入（五十二）今（五十三）此界（五十四）
 おり（五十五）念佛の人（五十六）と攝（五十七）淨土（五十八）歸（五十九）此（六十）此文（六十一）思（六十二）合（六十三）
 此時源空上人（六十四）五十四歳（六十五）
 一時後白河の法皇（六十六）源空上人（六十七）と宮中（六十八）請（六十九）往生（七十）要集（七十一）と講（七十二）藤原
 隆信（七十三）勅（七十四）上人（七十五）の眞像（七十六）寫（七十七）蓮華王院（七十八）の宝庫（七十九）藏（八十）
 蓋（八十一）殊（八十二）の外（八十三）御敬（八十四）ひ（八十五）蓮華王院（八十六）洛東（八十七）大佛（八十八）の傍（八十九）
 建久三年法皇玉體（九十）不豫（九十一）御惱（九十二）門葉（九十三）の人々（九十四）行舜僧正（九十五）法眼

圓毫法印祐賢等御祈禱のたえに。眞讀の大般若五檀の供養をんと有り
 其驗を給ふ。日随ひて御惱重らむ。あつち源空上人とせられ
 出離の大事に備ふたの思召る。仰ありて。上人謹言上らる。十善
 の御戒行の過去に今生に極む。今生の持戒勤行の未來の酬肉とせむ。御栄花
 北闕の御たの。今生に極む。万事の座下これ病床に極むと見せ
 給ふ。往生極樂の素懐を疑ひあせむ。娑婆の御たの。夢
 幻の。極樂の無量无边の法樂を。九重の有為の都。淨土の無為法性の
 臺なり。念佛往生の御信心。元數の舊業を消滅。一念に真如の都に
 とりて位。君を即身往生の。候。恩徳報謝の
 たり。御念佛。言。法皇御座了
 ち。西に向ひて合掌と御胸あり。念佛數返して。蓮臺結伽子
 素懐と遂さむ。御山崩筭六十一と云。

建久四年九月靈山平松の御房におつて。後白河の法皇御一周忌のため七日の御
 別行あり。結番衆二十三人あり。第五夜の寅の刻に源空上人が一個行道し
 夜に燈を。嵐を吹来して正面の障子と吹た。兩燈と消。闇
 道場の。見。給。人々の色。金色。諸上人と見。色
 御後。金色の圓光立。右の傍に生身の大勢至立。上人行道し
 板の上一尺。高く空を踏給。御足の下。八葉の青蓮華とせ
 念佛の御声。隨ひて御口より光明出。慈圓僧正月輪殿上人と拜し
 泣いて涙。五体と地を投。禮。奉。秋菫の三位入道觀佛聲や
 明け涙。歸命梵首大勢至菩薩三身薩埵法然上人。生々世々値遇
 頂戴と唱。二十三人の結衆と同音。斯の。月輪殿言。上人
 拜。右の御脇に生身の勢至立。行行道。

奇異の御事と申給いければ上人宜く観音におまゝと月輪殿あつたばと答へたまし上入仰せたる三信具足の念佛者と中尊の阿弥陀佛と説たつて観音勢至の供とありたつて勢至より添て観音のそいなまゝの思ひ然る小經の无量壽佛化身無數與觀世音大勢至常來至此行人之所と説給つて又若念佛者當知此人是人中芬陀利華觀世音菩薩大勢至菩薩為其勝友當坐道場生佛家と説つてあつて観音の立添のまゝ大不審なりと仰せたる生身の薩埵凡夫の肉眼を禮し奉らざる敢く奇特の候らるゝ上人三昧發得の嚴重なるを尊と云言らる

九條閑白親實公後法性寺職

洛西月輪の別荘に住せり故に月輪の禪閣と稱し

建久六年南都東大寺大佛殿十一間金銅十六丈八尺の盧舎那佛成就す三月

十二日供糧と遂らる鐵倉の右大将頼朝御結縁の爲小上洛あり都鄙の道俗貴賤の老若群参して最嚴なる大法會なり大勸進俊兼房重源の凡人にあつたり當寺の願文を見せり重源故の上の醍醐の僧徒也真言の學匠なり源空二人の高徳小歸して往生を願ひ師資の厚くせり尤上人の指圖も仍て大勸進職小補せり既小全く成就せり其効又類ひる其始造營と企るる番通の器量と選んが爲小工等とありて曰我家とほくんと思ふも楠の下に極と打んとあり如何あるを問はる番通かちと振る爾有家はるはし見やび申すと答ふ重源これ思ふすあり只造るべしとありたれを二のふ美引ど有まはたと仕出く傍輩小笑まん甚無益為業小と申す詩多の番通みふ此のそく答ふるまゝ其中小一人美引ものあり重源を我望む如き屋と汝これまで造らるるありやと此の答てしつて造候らる侍らるる何れ望ませり小修せり造つて試みらるちと申され其と死に

實乎此如く作らんといふべし。唯心の程と知んが為ふ言はるるを。則ちこれと棟梁の大工として東大寺とを造せしむるとん大なる方計策かとい人なりければ其項の諺ふ支度第一の俊兼房と言あり。源空上人大原におひて問答の折々と相具せしむ一人たり。上人の勸めふあまひて念佛と信仰の余醍醐にて無常臨時の念佛と勸めて末代の恒規と。其外七ヶ所ふ不断念佛と真隆せしむ。東大寺の念佛堂高野山の新別所ホその中より。往昔重源若年の折々。天狗ふとて或深山に在せり。天狗の首領とわがしむるは。是ハ行を多し大なる利益とせしむる人なり。速に許さしむ。天狗の輩と制しる程ふ。ゆゑに故郷ふりしり。その詞違ふ。大業と立れり。不思議なり。建久六年六月六日。東大寺にて寂せしむるとん

一説ふ建久二年六月六日寂す。又云建保六年六月六日。據るる前の建久八建保の書あやまらるるん物。因云此時大佛と鑄入用。唐金七十三万九千五百六十斤。黄金一万四百三十六兩

水銀五百八千六百二十兩。白鐵一万二千六百八十斤。金箔十五万枚。炭一万六千六百五十六石。治士。宋陳和桂。草部是助。佛工。康慶。運慶。定覺。快慶。番匠。物部為里。櫻嶋國宗。建久六年三月十二日大佛供粮。右大將源賴朝卿鎌倉より上洛。後鳥羽院行幸。導師推僧正覺憲。咒願師推僧正勝賢。征夷大將軍賴朝卿上洛の時武藏國の住人津戸三郎為守。生年三十三。供奉して上り。此為守ハ生年十八歳のと。治承四年八月。賴朝石橋山の合戦。武藏の國より馳参りて味方に加はり。介後安房の國へ越り。同く相後にて所々の合戦に忠勤と盡し。名とあげると言ふ。建久六年三月上洛して大佛供粮。後同廿日源空上人菴室に参りて合戦度々の罪と懺悔。念佛往生の道と兼りて。不称名の行者となり。本國に下りても怠り。或人熊谷入道津戸三郎といふ。魚智の者。餘行を難ければ

こを念佛ねんぶつげうと勸めめし。有智ういちの人ふい必しと念佛ねんぶつのま限かぎらざる申まを
 たりと為守たもとつ聞きこく事ことの次つぎ上人じゆんじん此由こゝよしと尋申たづねまをたり上人じゆんじんのま限かぎらざる。是これ
 極まぎく僻ひがく事ことなり。其故そのゆゑ念佛ねんぶつの行まを原もと未な有智ういち無智むち不な限かぎらざる。弥陀みだの昔むかし誓ちかひ
 ぬい本願ほんがんを普まく一切衆生いっせつじゆんせいの為ためなり。無智むちの為ため念佛ねんぶつと願ねん。有智ういちの為ため
 餘よの深ふか行まをと願ねん。十方衆生じつぱうじゆんせいのま限かぎらざる。有智ういち無智むち有罪うゑ無罪むゑ
 善人ぜんじん惡人あくじん持戒ぢけい破戒はけいかと思おもふも乃至乃至不な龍りゆうさる事ことなり。され往生じやうじやうの道みちと
 問と尋たづね候まを人ひと六有ろくいう智ち无智むちと論ろんぜども各念佛各ねんぶつの行まをとて教申まをたり。然しかるも
 虚言まを構かまへく余あま様さま念佛ねんぶつと申まを止とまるとる者もの。前生ぜんじやう念佛ねんぶつ三昧さんまい淨土じやうどの法はふ門もんと
 聞き後世ごせ不な又また三惡道さんあくだう。般はん死じ者ものの事ことと近まく申まを候まをたり。其由そのよし聖教せいけう
 見みて日ひく見み有あ修行じゆぎやう起おこ瞋毒しんどく方便はんべん破壞はわい競生きやうじやう怨うら如ごと此生こゝじやう盲闍まうじやく提だい輩ばい毀滅きめつ
 須教しよけう永と沈淪しんりん起過きこ大地だいぢ微塵ゑいじん劫けつ未な可得くわく離り三途さんず火かと申まをたり。此文このぶんの意い
 淨土じやうどとぬい念佛ねんぶつと行まをむ者ものと見て怒いかと起おこ毒心どくしんと合あて計策けいさくとぬいし

種しゆ々の方便はんべんとて念佛ねんぶつの行まをと破やぶり。辛あまして恨うらむ。是これと止とりんとする事ことなり。
 斯かくの如ごとく人ひとの生なむ事ことなり。以もつ來らい佛法ぶつぽふの眼まなこつれ佛ぶつの因いんと失うる闍じやく提だいの徒たなり。弥陀みだ
 の名号なごうと稱なづへく永と生な死じと忽たちち切きる常住じやうぢゆうの極樂ごくらく不な往生じやうじやうとて頭教とうけうの
 御法ぎほふとて言いふ。其罪そのつみふより三惡道さんあくだう不な沈しん大地だいぢ微塵ゑいじん劫けつと過する事ことなり。永とく三惡さんあく
 道みちの身みと離りる事ことなり。余あまれかゝる虚言まをとて申まを候まを人ひとをば。
 却かへて憐あはれむ事ことなり。左程さぢやうの者ものの申まをりて念佛ねんぶつ不な疑ぎとて不信ふしんと起おこる事ことなり。
 者もの言いふ足たりて則すなはち弥陀みだ不な縁えんとて往生じやうじやう不な時ときの者ものハ聞きる信しん言いふ
 行まをむと見てハ眼まなこを怒いかむ事ことなり。能たく心得こころえていふ事ことなり。
 人の申まをす心こころを緩ゆるむ事ことなり。強あらむ信しん言いふ佛ぶつとて力ちから及およぶ事ことなり。
 况なん凡夫ぼんぷの力ちから不な信しんの衆生じゆんせいと利益りやくせんとおもふ事ことなり。つて
 疾は極ま樂らくも參まりて證しゆ言いふ事ことなり。生死じやうじの事ことハ誹謗ひぼう不信ふしんの者ものも度たりて
 一切いっけいの衆生じゆんせいと利益りやくせんとおもふ事ことなり。念佛ねんぶつと言いふ事ことなり。

心を常あつて口を閉ぢて唱へて。後身も穢く口も穢く心も
 清くと言ふ。いつらん時たりとも忘れずして隙なく申す。往生の業ふ
 必ぢるべし。あぬ行又の是を惜む人のふ對ひて。強く仰せざる。異解
 吳学の人と見ては是を敬い。輕しむ謾とせられ阿弥陀佛ふ縁なく。極樂淨
 土の契とせぬ。人の信を願ふも。只心ふまうせつゝ。行
 行も。後生と助して。三惡道と離るゝと人の心ふ隨ひて。勸り候ふまう。
 塵をうらも叶ふ。人ふ阿弥陀佛とせぬ。極樂と候ふまう。いふ言ふまう。
 此世の人念佛ふあつて。極樂ふ生れて生死と離るゝ事あつて。此世返夏
 と給ふ。後いつ念佛の外他事まう。見へて。專修念佛の行人彼國ふ
 三十餘人まう。出来あつた。此由と上人へ申入る。專修念佛の人の
 世あつて。候ふ一國ふ三十餘人まう。候ふらん。誠實ふ天暗ふ候ふまう。
 建久八年の春源空上人月輪殿に。四帖の疏の御談義あつた。上人

入御あり。此時熊谷の入道蓮生房御供ふ推參も。上人を留めやと思
 召ひ。いふ。渠は。いふ。此を。此を。留め。却て惡く。御之。刑。近。の
 參らんと。思召く。何も。仰ら。月。輪。の。手。で。供。奉。奉。了。て。皆。脱。し
 候。縁。ふ。手。と。う。け。寄。居。た。り。既。ふ。上。人。御。前。お。ひ。て。御。法。談。始。り
 り。御。法。門。の。声。程。遠。く。して。分。明。ふ。聞。え。り。蓮。生。の。い。ふ。あ。れ。此。世。程
 口。か。へ。た。處。い。あ。り。極。樂。の。斯。る。差。別。の。有。り。候。と。御。座。所。が。遠。く。して
 談。義。の。御。聲。の。聞。え。り。と。腹。立。し。高。聲。ふ。申。ら。と。月。輪。殿。聞。し。ち。し
 是。は。何。者。と。御。尋。あり。源。空。の。な。ま。う。渠。は。武。藏。國。の。住。人。熊。谷。次。郎
 直。實。と。申。武。士。と。候。右。大。將。殿。と。恨。ま。て。出。家。し。伊。豆。國。ふ。走。り。湯。山。ふ
 參。籠。り。候。い。が。上。洛。仕。と。源。空。の。弟。子。と。り。て。候。ま。如何。と。推。參。し。り
 供。を。て。候。と。お。ひ。え。候。と。仰。ら。れ。月。輪。と。は。優。し。ま。う。何。と。い。ふ。ま。う。と。い
 唯。め。し。て。御。使。を。出。さ。り。て。召。れ。ら。ふ。熊。谷。の。一。言。辭。退。し。及。ぶ。召。ふ。隨。ひ。

近く大床小伺候して聴聞はうらう。往生の極樂へ當来の果報まで遠し。今忽ち堂上でもまれ。今生の果報と感得のめり。本願の念佛と行を争ひ此或ふ及ぶと耳目と驚いてて見えり。

熊谷次郎直實。姓は平氏武藏國の人也。父は直貞と号し。桓武天皇の遠裔。直方が後めて直貞少きより勇氣あり。其住居する邑國。武藏。熊谷。あつて多く人と書は直貞弓と引く熊と射る。熊矢と負かぐ。直貞小飛。直貞刀といひ終ふ是と斬らる。一族及び村民大に驚き且喜ぶ。あつて於て其地と熊谷といひ。又熊谷とて家号といひ。直實も父が以て大剛勇の武士なり。平治の乱は源の義平が属して郁芳門と守る十六騎の隨一なり。後小頼朝が属して常陸國佐竹の役は高名あり。又根州一の谷の戦ひ。平山の武者所季重と先登とて軍劫少き。且敦盛と討て後道世。出家得道して蓮生と号く。京都新黒谷に至つて源空上人と師と事を

或曰直實武州久下推守直光。直實の境目と争いて之と訴ふ直實訴る所小審あり。頼朝之と譴問ふ直實殆ど答る詞と失ふ。而て大言して曰く。梶原景時小黨もとのゆゑ此の如き下問小預る。たゞい明らる小辨證を。と勝負を聞ぐ。乃ち文書と巻て庭中小投入座とて臆指と技髪と切く走る。頼朝人として之と追ひひれも遂得を道世といふ。僧とて信心堅固して。専修念佛。他事とまへ。嘗て粟生野光明寺と建す。寓居して後。従弟幸阿弥陀佛坊にあつた故御小下行住坐卧小西方と後小京都より東小下る小鞍と逆ま。向く馬小兼行して云。

源平盛衰記云く。修理大夫經盛の末子魚官大夫敦盛。緝の錦の直衣。小萌黄白の鎧。小白星の冑と著し。滋藤のち小十八指。護田の鳥の尾の矢。鶴毛の馬小乗。たゞして只一騎。新中納言の兼。舟と志して。一町ぐる。游がせて

一の谷の戦場
直實敦盛を討つ

平家物語云
大夫敦盛卿ハ
修理大夫經盛卿
の三男ハ七
歳の死ニ至ル迄
沖ノ船ヲ目
子馬ニ海ニ入
五六段ノ遊ガセ
られ跡ヲ熊谷



直實追ハテテ上
テ招キテ取テ下
打際ヲ組テ討色給
首ト包マンテ鎧ノ直
ト解キ錦ノ裏
入ラレテ笛ヲ腰サ
タラハハハ此曉一
城中少テ管絃ハ
アセオウラス
の見参入
直實これより世
心發テ終ハ源空上人
弟子ト成リ出家
蓮生ト号ト



浮ぬ沈ぬの漂ひる武藏國の住人熊谷次郎直實の哀れは敵不組やと渚に
 きて東西と伺ひ居たり所是と見附馬と海にぞと打入れ大將軍と見
 奉れ正つと海に入らせぬ哉返くやと斯まると日本第一の剛の
 者熊谷次郎直實と言ひぬ敦盛何れも馬の鼻と引く渚に向け
 ても遊がせたる馬の足立程にけり矢と投て太刀と抜額あて
 喚つて上りたしひりて熊谷待うけて上りたてど水鞠と蹴せり馬と
 馬と馳まづと取組浪打際ふと落ち上り下り二度三度の
 ころびたりれども大夫の幼若かり熊谷の古つものよりけり遂に成
 左右の膝と以て甲の袖とひきと押れば大夫少くと働きたまふ熊谷
 腰の刀と抜出既首と掻んとて丹胃と見れば十五六の若
 上臈薄化莊ふかひ思ひ微笑とみて見えたる熊谷の無
 慙や子失し身何やんこれ若くは上臈ふととふ刀と立

ぞをぞと心弱くと思ひける抑誰の御子あてと問われは只と慙
 とを宣ひける切奉つて雜人の中ふ乗と死進せん便侍と浮やも知ぬ
 東國の夷下臈ふあて名乗まと思召る歎それも所理よとてと
 存ざる旨あつと申うると大夫思はるる名つたるも名乃とすも道
 づと非ど但存るひねる勲功の賞と申さん為とあはれ組し切らと
 と先世の契離と思あて報ざる也とあはれ名乗んとおひつ存る旨
 の有るに聞たるを是の故大政入道殿の弟小修理大夫經盛といふ人の
 末の子と無官の大夫敦盛とて生年十六ふも也と宣ひり
 熊谷流とて流りあか心憂の御事や偕ハ小次郎と同年とや
 實小左程と御座はん岩木とてぬ心も子の悲類ひ況や是
 小次郎と同年ふと給る最惜も助け奉らや又御心も猛人ぞ

座より日本第一の剛の者と名乗つる。落武者の身として此年の若き返して
あそ給つるも大將軍とありえり。是は公軍なりあか惜や。せんと思ひて
てき押つて案どりふ。前も後も組で落思ひくふ分捕らる間。熊谷
こそ一の谷とて現組より敵を逃して人ふ取れりと言はん。子孫あつて
弓矢の名と折べし。思ひつて申る。何と助け進ませやと存侍も
いも。源氏陸小充滿より迎ひ道きわつた御身より。御菩提を直安
よく訪ひ奉る。草の陰に御覧せよ。疎略あつて信ず。目と塞
齒とらひ合せて涙とら。其首と極落と。無慙とらも思ふ。敦盛歎
と恐れを心を降さば。幼齡の人とて。頗る凡庸の類ひ。非ざり
り。平家の人々。今討れ給ふ。情を捨れ。此殿軍の陣もと。
隙に吹んと思ひ。色とら。漢竹の笛と。香しむ。錦の袋
ふ入れて。鎧の引合せ。指たり。熊谷之と見たて。最惜や。此程も城中

小此曉と物の音聞え。此人とて御座り。源氏の軍兵。八東國。數万
騎上りなれ。笛う。その一人も。如何なれば平家の公達。名もふ優。六
御座り。と決して。彼笛も。父經盛。笛の上。手ふ
て。砂金百兩。宋朝。ふ。漢竹と一枝。とせ。殊ふ
く。兩節の間と一與。天台座。主前の明雲僧。正。仰。秘密
瑜伽壇。お。七日加持。秘藏と彫。笛より子息達の
中。い。敦盛。器量の仁。七歳の。傳。持。夜更。ふ
ま。熊谷の。笛。手。子息。小次
郎。許。見。修理大夫。御子。無官。夫。敦盛。生。年。十六
と名乗。助け奉。思。汝等。弓矢の末。顧。斯。目と
見る。悲。縦。直實。世。者。宍。賢。後。世。吊。奉。言。舎。り。
夫。熊谷の。發。心。の。思。ひ。出来。後。軍。中。畧。熊谷

治郎直實ハ敦盛の頸と取らざりて嬉しむと忘るて只悲しむるを
 流し甲の袖と濡しり。借しれりぬと葉づふ思ふ禽獸まじり子と
 思ふ道志深し。峯の中身と亡し矢先あつて命と失ふも子と思ふ
 情あり人倫の情まじり子失ふ身と何やん子孫の後と思ひけ
 他人の命と奪つん蜻蛉の有るは身の身と何思ふ世の末と是
 程小若くうづれ上薦と失い歎たうん父母の心の中を最惜しん
 なむ勲功の賞ふ預らば此首遺物返して送て今一度かゝる貌をも
 見奉らばと思ひんば實檢ふと合せ懸首ふとさうられども大將軍申
 請く馬鞍甲冑子失漢竹の笛一と取落さば一紙の消息状相具して
 敦盛の首と父修理大夫と送て進状返すあり
 直實ハ此返事とわいて最々涙と流しけ為方うとぞおひり。穢土の習
 と悲しむ通れやと思ひる。西國の軍鎮つと。黒谷の法然房ふ参るつ

廿五

髻と切蓮生と名をつらて終ふ世と背きりんと
 建久八年の初冬ふ月輪殿源空上人の御菴室ふ御入ありて常し心御心静
 小御物語あり愚老一期の間ハ明鏡不對ふ心持して上人ふ値参らば邪念
 翻へ雅行自力と捨て承て承て信と傾け候ふ。あつて一期の後子
 孫も傳へ又末代の學者の手本證據あつて候ふする肝要の治定
 ころ聖教と少と方便推門く。御制作候て給て候り當代末代乃
 鑑と存むく候ふと仰られハ上人聞召ま。其日考へ見参ふ入て假名
 書の文と上下二巻撰まれ。月輪殿へ参らせらる。拜見し心肝
 添て殊勝ふ思召あつて假名書ふて余目安くと却て返々く説ひ假ん
 も無念ふ候ふあつて真名ふ撰びて有る。同年正月ふ清書
 あつて一本月輪殿へ進せられらる。之と題して選擇集と号と
 一書云建久八年源空上人の惱めとありたり。月輪どの深く御うげと

ありける程ふ幾やうして平愈しひまらう。上人同九年正月一日より草庵ふ
 閑籠して余所ふゆひきなまらうれば藤左衛門重經御使として浄土
 の法門年采示して承るとして心ふをあらう。要文と記して給へ。具ハ
 對面ふ擬らう。且ハ後の御形見もまらう侍人と仰られれば安樂房外記入道師
 と執筆として撰擇集と選むせられらう。第三の章書寫のよは我り筆
 作の番ふあはれ。此の如く座ふ参をうと申らう。上人聞なすひて此僧
 自慢の心深くして悪道ふ落さんと是と退けらまらう。其後の真觀房
 感西あが書せしとらう。此書と選び進むとて後。同年五月一日上人の夢
 の中ふ善導和尚來現して汝專修念佛と弘通とら故ふ殊更ふまらう
 たりと示しつ。此書佛の御心ふあらうと知ぬべし。さうく信仰とらふ
 たりと云ふ

源空上人月輪殿へ参りて云ふ兼實公御まらうとて下向せらる。卿相雲客

下は騒ぎなりと勿論なり。程ふ上人此礼の慇懃なりとて思ひて。
 月輪殿へ参りて云ふ兼實公御まらうとて下向せらる。卿相雲客
 出なすなりと兼實公云ふ御嘆き有る。後房籠たりとも。身ふ煩ひるの
 ありさうふ来らる。仰られれば其後常ふ御煩ひと号せしむらう。され
 どと數々請うたまはれり。終ハの辞退申す。参りて云ふ弟子正行
 房心中ふ。あれ房籠とて余所へまらう。月輪殿へのまらう。なすふ
 擅那と諂ふ。人の謗とあはれ。まらう。御事うかと思ひて寢る。夢
 ふ上人のなす。汝ハ月輪とて行くと。謗とわらふと仰らう。ふらう
 事候とて申せば友あはれ。月輪とて我ら前生ふ因縁あり。餘人ふ
 擬ふ。宿因ありとてあはれ。謗とわらふと起る。定めて罪と得べし。う
 と仰らうと見て覺て後上人ふ。此とて諂ふ。偕ハ前生ふ因縁あり。餘人ふ
 宣ひらる。御歸依他ふ異とて誠た。まらう。覺えらる。也

建久九年の夏園城寺の碩徳大僧正公胤道来源空上人製作したる選擇集
 と一覽あり。大正偏執して彼書と破りんが為小一卷の文と作し淨土決疑抄と
 著し。此書小云法華不即往安樂の文あり。觀經不讀誦大乘の句あり。法華讀
 誦の者授樂不生せんと疑ひし。唯念佛と附屬する是大方の誤りなり。源空
 上人是と御覽し終らば。閑を給いて云く此難甚だ非なり。先難破はるの宗義と
 ろうて後難どへ。然らふ今淨土の宗義小暗くして。僻難といふは誰ぞ
 破られん。未淨土宗の心。觀經前後の説。大乘經とて皆悉く往生の舟小
 撰入せり。其中小何を法華いふ漏んや。觀經小普く撰入する意へ念佛對して
 瘞せんが為なりと云。公胤これと傳聞し。唇と閉て物と云す。一時順徳院の御壞姓
 の間公胤の加持の為小召する。源空へ御往生の為小召る。同く院考あり。奉行
 遲参のあり。兩上人と一所あり。數淨土の法門と説き。さるる程小公胤
 本房ふらうて弟子等小向ひて云く。昨日の参内小二の徳と得たり。一ふ未と聞ざる

淨土の宗義と聞。二ふ本知たる事の僻りと改む。寔はもつて源空の宏才なり。
 見ざるの淨土の宗義聖意不違と云ふ。偏小源空上人の義と信むべし。諸
 人の大なる科あり。我作所の淨土決疑抄と燒子ぬ。公胤の不審小諸行と
 許さば。悪人をも往生と況や諸行と云ふ。皆善あり。何を強ら小嫌ふと云ふ。
 源空の答小一向專念無量壽佛と説り。觀經小繫念弥陀一所想於西方と
 説し。又同き經小念佛衆生攝取不捨と説き。阿弥陀經小一心不乱と説き。善導
 の御釋小一向專念弥陀佛名と釋し。天親菩薩ハ世尊我一心と云ふ。是諸
 行と閉く文あり。諸行と交へ雜行自力あり。是と隨縁雜善恐難生と瘞
 給ふと云々。様ど。小明義抄小此條建久七年とあり。又。選擇集と清書あり。の
 一書小云源空上人語とて宣く。我一向專念の義と云ふ。人多く謗とて云く。
 諸行と修とて。も全く念佛往生の障とて成るべし。何を強小一向專念の
 義と云ふ。是偏執の義なりと云ふ。斯のづく難と出ひ。此宗の謂と知らざる

故より經ふの一向專念元量壽佛といひ釋ふの一向專念弥陀佛名と判り。經釋と放まそ私小義と立ハ誠責る所道なり。此難と出さんとおり先釋尊と誇り次小善導と誇るべし。其科まづく我身の上ふ非と仰らん。一向專念の義と破る人多る中。園城寺の長吏僧正公胤と大僧都とありしと死上人と誹謗して云く公胤が見たん文と。法然房の見ねらありとも。法然房の見ねる度と公胤の見ねるもあはと。自讃して淨土夾疑抄三卷と記して選擇集と破れ。則ち念佛房と使して源空上人の菴に贈る時上人彼使者あひひてこれと披き見うふ。三卷の初め法華ふ即往安樂の文あり。讀誦大衆の句あり。讀誦の業極樂小往生とあり。何の効ありん然るふ讀誦大衆の業と瘞して唯念佛とありと附屬とあり。是大なる誤りといひ。此文と見うひて終と見む。さして宣く此僧都とれやどの人といふ。ざりに甚無下の事なり。一宗とある時。これ瘞立の旨と存さんとありとあり。

然るふ法華とてつゝ觀經往生の行ふ入りし事。宗義の廢立と忘るる。似たり。若し學通るべ觀經ハ尔前の教なり。彼中法華と撰とむる。とど難せしむ。今の淨土宗の心。觀經前後の諸大衆經と取く皆悉く往生の行れ中不撰とるん。法華獨りとれんや。普く撰とる意ハ念佛對と是と廢せん為なりと宣ひれば。使歸く此由と語る小僧都口と閉て言はる。一時宣秋門院中宮とて。一品の宮御懷胎の時。源空上人ハ御戒の師と召れ公胤僧都ハ御導師と參りし。參會しめと侍り死。御持戒とて源空退出せんとあるふ。まづ侍り見奉ふ侍りと。公胤僧都の使僧申ふ。まづ侍り侍り。御經供養とて僧都来て源空ふ場して云く。上人ハ念佛の事と尋ね申べれども。先大要とふつとて申侍るなり。東大寺の戒の四分律と侍り。謂と侍り。有れば。東大寺の四分律と侍り。有る道理と詳し。擇り。僧都とて考見うふ。源空の申さる。

熊谷西方小向い
て故郷小下る

熊谷蓮生房の信心
堅固にして専修念
佛他事と雜こと
嘗て粟生野光
明寺と建て寓居し
て徒弟の幸阿弥陀
佛房小謀して故
郷小下る平生行住
座卧小西方と背
みせ京より関
東小下る小鞍と
逆して後小向て
馬小乗てゆ



浄土を以てがらの
のしやゆはこ
西へ向ひて
見ゆる
嘗て往生の
期を以て
兼元二
年九月
四日故郷
小向い
大往生
遂に
行年
七十二歳



音すくと違ふるれば次の日又參會の時昨日仰られ侍りしことも實り
さ修いりつて僧都以外の外も源空と敬し淨土の法門と説く兼て
余の事ども語られる中ふ玄暉と云ふ僧都申され其宗の人の
申侍りしを承り申侍りしを暉と書ててて。引讀され暉と書
てはらんとて訓侍りて源空直りいひける。惣じて斯の如きの誤りも七ヶ條
の僻事と直されたり常子見參せの才覺へつて侍りし。まの所の淨土の法門
聖意不達と云ふべ仰りて信じて彼上人の義と講ると是大方科なり
ては、其の製作の決疑抄三卷と焼もふたり。誠小博覽のまかりかろるるを
譽申される。公胤僧都の頭密の達者にて智行兼備の高僧なり。まの
斯稱羨せられし。信と取りふ足れる者なりと云

廿七

正治二年の冬山門ふ桓舜僧都とて學通あり。源空上人の菴室ふ參りて聖道
門の殊勝とて道理と詳く述べて淨土門の淺邊の教るる条至極なり。弥陀の本

願へ推教推門よく得道愚るる言われ源空とて是と敬し
聞りて頷て宜ふ。諸宗の愛度とて言語かひあ。然りて源空
等の如き愚痴ありし難行難悟が故本願と頼り奉り弥陀の御力にて
往生とて佛ふ大經觀經の両經に弥陀の番号に無上功德と説き又
汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名と彌勒阿難ふ付属したまへり。天
台大師ハ難解難入且置不論。即詣西方值佛問悟と示り。宗家ハ又鈍根
无智難開詰と釋したまへり。菩薩ハ又難易の二道と分別せし事ありたり。
御辺の仰せり法門ハ源空習學とて一昔を承り淨土の法門ハ習學を
びして押つての簡へ徒らなり。此度の得道あるはなまふ。仰りし料簡ハ
法華三昧の肝文とて承り弥陀なり。斯の如きの法門と云ふべ日のまの
と見ざる。淨土の法門聖道の修行ハ超過して往生やとて三世の諸佛
説十方の佛も證誠したまへり。至極の法門と委しく説かへる。是も流石に

廿八

学庠^{うくわう}にて感^{かん}涙^{なみだ}と淳^{じゆん}りて頭^{あたま}て多^{おほく}年^{ねん}の習^{しゆ}学^{がく}と閻^{えん}淨^{じやう}土^どの法^{ほふ}門^{もん}とす^まりて堅^{けん}固^この
 信^{しん}心^{しん}と起^{おこ}し終^{つひ}に三^{さん}ヶ年^{ねん}の後^{のち}奇^き特^{とく}の往^{かう}生^{じやう}と遂^{つひ}に^して
 梅^{うめ}尾^びの明^{めい}惠^ゑ上^{じやう}人^{にん}高^{かう}辨^{べん}ハ其^{その}項^{かう}世^ぜお聞^きえ一^{いつ}碩^{せき}德^{とく}おし盛^{さか}不^ふ賢^{けん}首^{しゆ}宗^{そう}と唱^なふ時^{とき}お
 源^{げん}空^{くう}上^{じやう}人^{にん}の著^{あつ}しりつ^て選擇^{せん}集^{しふ}と見^みて之^{これ}を難^{なん}し摧^{さい}邪^{じゃ}論^{ろん}と^しつ書^{しよ}と三^{さん}卷^{まき}記^き
 て選擇^{せん}集^{しふ}と破^わし源^{げん}空^{くう}の門^{もん}徒^と拳^{けん}つゝ摧^{さい}邪^{じゃ}論^{ろん}お難^{なん}と加^かへる^るが^らう^らて莊^{じやう}嚴^{えん}記^き
 と^しつ三^{さん}卷^{まき}の書^{しよ}とあ^ありて其^{その}難^{なん}と救^{きう}せんと^し義^ぎ理^り相^{さう}應^{えい}せらる^るの^ま間^ま此^{この}書^{しよ}と
 作^{つく}ら^れてつゞき名^な譽^よと落^おち^おりて入^い道^{だう}長^{ちやう}房^{ぼう}卿^{けい}ハ原^{げん}來^{らい}明^{めい}惠^ゑお皈^ましたる^る人^{にん}
 ろ^らり^しれ^ば彼^{かの}摧^{さい}邪^{じゃ}論^{ろん}と信^{しん}じて高^{かう}野^のの明^{めい}遍^{べん}僧^{そう}都^とお見^みせ奉^{ほう}らんと^しな^なりし^し時^{とき}
 明^{めい}遍^{べん}それ^の何^{なに}の書^{しよ}と^もな^なり^しな^なりし^しる^るお選擇^{せん}集^{しふ}と破^わしたる^る書^{しよ}と^も用^{もち}れ
 り^らば我^{われ}ハ念^{ねん}佛^{ぶつ}者^{しや}たり^し念^{ねん}佛^{ぶつ}と破^わしたる^る書^{しよ}と^も手^てお^おり^しる^るが^らう^らて目^めを
 見^みる^るが^らう^らて^もな^なり^しる^る彼^{かの}入^い道^{だう}長^{ちやう}房^{ぼう}卿^{けい}と後^{のち}お選擇^{せん}集^{しふ}の尊^{そん}を
 事^{こと}と聞^きひ^して却^{かへ}て選擇^{せん}集^{しふ}お皈^ましたる^ると^もその^{その}文^{ぶん}が邪^{じゃ}論^{ろん}たり^しと申^まさん

其^{その}後^{のち}又^{また}仁^に和^わ寺^じの昇^{しやう}進^{しん}房^{ぼう}れ邪^{じゃ}論^{ろん}と持^もて明^{めい}遍^{べん}僧^{そう}都^とお見^みせ奉^{ほう}ら
 上^{じやう}僧^{そう}都^とのつゞき凡^{おほ}そ破^わの道^{だう}ハ先^{せん}破^わる^ると^もその^{その}義^ぎと^も心得^{こころえ}て^も破^わ
 と^もな^なり^しる^るお選擇^{せん}集^{しふ}の趣^{すゝめ}と^も心得^{こころえ}て^も破^わせられたる^る也^{なり}と^もな^なり^しる^る
 破^わす^るお的^{てき}と^もな^なり^しる^る其^{その}中^{なかつ}お異^い学^{がく}異^い見^{けん}と^も以^{もつ}て群^{ぐん}賊^{ぞく}おた^たつと^も破^わせられたる^る
 是^{こゝ}善^{ぜん}導^{だう}觀^{くわん}經^{きやう}の疏^{しよ}の文^{ぶん}り^し全^{ぜん}く法^{ほふ}然^{ぜん}房^{ぼう}の^ごお非^ひば大^{おほ}く生^{しやう}然^{ぜん}と離^りれんと思^{おぼ}ふ
 程^{ほど}の^ご人^{にん}の是^{こゝ}まで罵^{のの}詈^ぎ誹^ひ譏^ぎせし^しと^も心得^{こころえ}て^も宣^{のたま}へ^り彼^{かの}明^{めい}遍^{べん}僧^{そう}都^とハ
 日^{にっ}本^{ぽん}弟^{てい}一^{いつ}の誓^{ちか}り^しる^る大^{おほ}徳^{とく}たり^し一^{いつ}時^{とき}室^{しつ}置^ちの解^げ脱^{だつ}上^{じやう}人^{にん}澄^{じやう}憲^{けん}法^{ほふ}印^{いん}明^{めい}遍^{べん}僧^{そう}都^と會^{かい}
 して我^{われ}等^ら一^{いつ}族^{しゆく}三^{さん}人^{にん}の^ご宗^{そう}論^{ろん}侍^まりし^しと^も宣^{のたま}へ^り澄^{じやう}憲^{けん}法^{ほふ}印^{いん}筆^{ひつ}と^もな^なり^しる^る
 三^{さん}論^{ろん}お明^{めい}遍^{べん}ある^る敵^{てき}の劍^{けん}と^もな^なり^して敵^{てき}と害^{がい}も法^{ほふ}相^{さう}お負^お慶^{けい}あり^し解^げ脱^{だつ}す^ると問^とふ
 す^ると^もな^なり^しる^る宗^{そう}論^{ろん}と^も叶^あは^はれ^しと^も書^かけ^しる^るす^るて二^に期^きの^ごあ^あら^ら論^{ろん}義^ぎり
 ば^ば申^ます^ると^も申^ます^る斯^{しか}ら^らう^らの^ご高^{かう}僧^{そう}の尊^{そん}り^しる^るお選擇^{せん}集^{しふ}の^ごあ^あら^ら
 と推^{おし}して知^しる^ると^も申^ます^るお明^{めい}惠^ゑ上^{じやう}人^{にん}と昔^{むかし}宰相^{しやうさう}為^なり^し長^{ちやう}卿^{けい}の許^{もと}へお^おり^しる^る

推邪論の如しと申出たり。明惠の云く。さきと侍り。と僻言を
りり。と思ひ。今後悔し侍り。と申されし。事なり。

廿九

元久元年十月天台の座主華頂峯の雲朗僧正。学庠等と集り選擇集の
御沙汰あり。其中小聖道と捨て。浄土門小歸。とて。一切の行集と
傍り。とて。皆乃至隨他の前より暫く。定散の両門を閉くと。隨自の後の
如つて定散の門を閉くと。文より。如て聖道門とて。定散を閉雜行と傍
り。とて。捨開閣傍の四の名目と座主外より。我祖師天台大師の四教五時と作
て大小權實と立なす。嘉祥の五教と判じ。三乘眞實の旨とあり。惠果阿闍利
弘法大師の一代の佛教と頭教と。大日の二法と密教と。撰り。各宗と立。其
謂あり。法然房の如し。諸宗と滅亡し。諸教と破らる。此学佛法の外
道守屋小春。早くと動。奉り。洛中とあり。永く无間の
地不移とあり。大徳とあり。同心せり。否やとあり。尤の

御義と同一奉り。早々明日大講堂の庭小會合。定判及ぶ。とて。
座主御房退散を。同十五日山門峰起して。三千の衆徒會合して。金議まら
り。中にも西塔の法師。但馬の堅教。浴秀進。出て言。佛法は王法より
佛法盛んの國より。法厚し。抑源空法師の佛法興帳の如し。往昔本朝の佛法
と増し。王法と厚く。神威とあり。佛法失せり。輩も似て。既太子種子と
断ら。是則ち佛法と重し。故に法敵と。源空法師と。又東塔南
断罪。諸宗佛法と興。王法繁昌の國なり。者も。又東塔南
谷の注記。祐覚進。夫惟れ。吾山。七佛草創の地なり。三國傳法の如し。
たり。桓武天皇の御宇。當山の中堂と。色来。とて。諸山より。法
薬師の威光。余佛より。猶秀。とて。當山の法燈。とて。湖上。同は
山王御宣有。無才無了。簡の徒。法然房の智慧。とて。歸敬の首と
碩く。當山。是同。日域。又佛法の。急速。洛中。弟子

等と遠國に配流せしむるに命とす。衆徒尤も同じ。訶状とて上げて奏覽を
 經る。君用ひまゝの神典と陣頭あさげ。入浴して天裁と仰ぐ。金議一
 頃て翌日訶状の草案して。同七日小藏人の註記清書とて。衆會の中
 て披露せしむ各々と聞て神妙の義も同。中山大納言の添状あり。三
 千の衆徒一同の状進上せり。候ふに天裁と蒙り。喜悅の眉も。源空
 源空法師一人と。三千の衆徒等と思ひ。勅宣ふまじ。源空の
 速。天中披露あり。本望ふまじ。恐々謹言十一月日謹上。中山大納言殿
 と訶状とて。不日遣り。天中披露あり。其勅宣ふ云く。沙門源空の
 興隆佛法と信。諸宗とわたり。捨らるる非也。先皇貴尊の佛法
 源空の重て信せり。所々山門の盪妨。班足の憐み。三千の
 辭憤文。小隨ひて徳小取せり。天氣斯の。槐門藤原朝臣隆房。執
 達如件。衆徒論旨の。神典と下浴

の披露あり。源空難義小思。山王の御寶前。御起請
 文其状小曰く。沙門源空敬白。山王七社護法善神。諸宗誹謗の事。諸教と
 破謗。自宗獨成。是非。唯瘞權立實。諸宗の常法。源空
 の新義。非は是。諸教滅盡の基。難易の二道。論文。源空
 若條々偽ら。六方の諸佛の知見。殊小醫王善逝の御加護。別て
 山王七社の御罰と蒙り。今度の宿願空して。水く生火小隨せん。仍起證文
 如件。元久元年十月日。沙門源空敬白。十禪寺の御寶前。納め畢ぬ。七
 七條の起證文あり。二百余人の連判之。山門漸く。手りり。あつる
 余後。南都興福寺の憤。二年九月。蜂起。訶書とて。彼状
 の如く。源空及び弟子。推大納言公繼卿と。重科小所せり。由。訶
 是。あつる。同十二月十九日。宣旨と下されて云く。項年。源空。都鄙。念
 と。勸む。道俗。多。教化。不。然。今。彼。門。弟。の中。邪。執。の。徒。名。と。專。修。了

かしを以てよく破戒小願と。是偏小門弟の浅智より起りて却と源空が本懐小月く
 偏執と禁遏の制不守りしと。刑罰と誘論の徒小加ふる事と。云々。君臣の歸
 依浅く。唯門徒の邪と制して。科と上人小懸られざり。斯く南都北嶺の訥詔次第止りて專修念佛の興行無為小を所小。次の年
 建永元年十二月後鳥羽院紀州熊野山小臨幸あり。其項源空上人の門
 徒住蓮房安樂房の徒東山鹿谷小して別時念時と。六時禮讚と勤
 りの聽聞の貴賤群と。發心と。數多あり。中に御所の御田守小。宮
 女出家の事あり。程小熊野より還幸の後あり。言を人やあり。大
 小逆鱗おおい ぎせんきりて。翌建永二年二月兩僧と。罪科小所。安樂房六條河原
 住蓮房ハ。邊江國馬淵小於く死罪小行。住蓮ハ首より光と放ち。落る頸高色
 小念佛十餘返り。安樂ハ頭おろして後念珠と。事百八。口より蓮華と生じ。これ
 の奇特と見て斬ら。と。悲し。念ねん佛ぶつして道世と。者最多し。

さりて小日頃恨と結ぶ。山門南都の大衆其折と得く再び噉訥小。山
 王の神輿春日の神等と振奉らん強勢。且ハ種々譏奏と。有故小。月輪殿の御
 力と及ひ。終小源空上人土佐國ハ流刑小定まり。其余僧徒八人諸國小配
 流せ。其法小依く俗名と。藤井元彦と改め俗衣と著せ。今年御
 年七十五去年の冬より御髪と。白髪しらがの老公羽と。打鳥帽子
 を引入進せ。水色の直垂と被ら。兼元元年四月十日或ハ言 十六日の己の大鼓鳴
 り。官人くわんじんと御輿進みこりられ。と申あ。頭かぶて輿小打棄うちすたま。其時月輪殿秋殿
 堀河殿古京極殿大宮殿已下坂東の武士受学相承の御弟子達三百余人御輿
 の前後小。午刻小御出あり。角張の成阿沙弥隨蓮
 覺阿道佛かくあだうぶつと力者の棟梁と。御弟子十二人公かみの御と惣むすじて六十
 三人御輿の前後小。進ませ。七條と西にし大宮と下。鳥羽と。趣おもむき
 法性寺より鳥羽までハ御輿と通し得と。知るも知ぶるも。貴賤男女道の左右、

坂本の猿叢岳
登つて伽藍と
乱妨も

日吉山王権現ハ江州
志賀郡坂本ふあり
上の七社中の七社下の七社
合て廿一社入王卅九代
天智天皇の御宇ハ
始て鎮座あり桓武
天皇延暦十年
始て御輿と出
して祭禮と
行はる釋行圓
不示現あつて以
後山王と稱は



猿と以て官者
とて春日の鹿
八幡の鳩やひ
山王の群猿叢
山の伽藍と乱
妨一佛像經卷
と破却と
とて小念佛
停止の法令と山
王権現のついで
りて靈驗あり
と聞ゆ



三國七社山王権現圖巻五
三十八

充満して袖と負あて袂と絞ぬわ。哀らうし事ども有り。鳥羽の南門
 より河船あられ御下向あり。介後江口神崎の辺よりして海船ふ移りて南海へ
 趣まらま。又鬼神出現奇怪あり。又事あり。同廿日讃岐國那珂郡小著せり。い
 りり。高橋入道西忍の許へ入進し。上人と別所へ宿させ進させ湯屋結搦し。美
 膳調味して。饗應斜を。此地ハ月輪殿の所領あり。ゆゑ
 先達く御使と下され。懇あて。兼畧を。仰せ附られ。且官人子仰ら
 られ配所ハ土佐の國小定あり。他人の所領され。覺束ふ。讃岐國那珂郡ハ
 自領分され。夫下し進せ。有し程。小。儲當國小著船せり。去程小官人ハ暇申
 して同四月廿八日。飯洛ふり。斯く西忍ハ上人と置奉る。在家あり。今年ハ定
 多し。當莊内の清福寺と。真言宗の道場。入す。今年ハ定
 越年ハ。翌承元二年八月支度の道場。小移り。介後松山の莊長樂寺
 小趣き御逗留あり。又阿波讃岐の國境。萬歳山。柳見の巖。つよ至り。承元三年

小土佐國室の津金剛智足權の岬と拜廻し。三月の末。小又清福寺へ飯。配流の間種。利益あり。略之。
 承元四年七月二日。小山王の猿坂本より。二三十東塔。不登。中堂の四十八燈と打けし。
 巨大鼓と打破。坂本へ下る。次の日。猿百四五十より。惣持院の十二燈と。うらけし。戸障子
 打破り。又下る。次の日。猿二三百より。文珠と引倒し。四天王と打轉。なぶく
 房。不。乱。入。して。經論聖教。より。房舎と破却。座主。な。事。不。非。は。を
 門。前。へ。相。れ。大。鐘。と。撞。て。三。塔。會。合。し。僉。議。す。式。人。云。我。山。ハ。王
 法。と。守。り。奇。持。前。代。未。聞。の。珍。事。若。佛。法。王。法。の。危。尤。祈。禱。あ。る
 ぞ。と。云。東。塔。南。谷。藏。人。の。註。記。も。ん。で。云。軌。信。和。尚。より。以。来。十。六。代。程
 の。先。規。傳。侍。り。定。め。て。山。王。の。御。咄。あり。十。禪。師。の。御。寶。前。より。護。法。の。占。と
 聞。召。さ。る。衆。徒。尤。と。同。じ。と。明。る。七。日。十。禪。師。より。西。塔。北。谷。教。受。房
 の。美。濃。の。堅。者。の。童。小。辰。王。と。今。年。十。三。歳。ふ。と。大。床。不。上。置。て。地。藏。の。大。咒。と。満
 く。護。法。と。奉。ら。ん。と。欲。い。更。ふ。給。各。肝。膽。と。碎。き。五。大。明。王。の。法。と

とつと祈りたる小聊と驗す。時小東塔北谷性智房法印の弟子小菊壽と九歳
あたる小児あり。其日の衆會の體んんと。若き輩と俱小下りて。許多の僧の中より。
小鳥の如く飛出て。拜殿の大床小上り。辰王と叫のけて。其座小居直るる。時老僧
カと得て。此をどの山上の猿の悪吏凡ごの覺えは。候ふ。さうして我神慮のおかし
うの旨傳ふ。早々をり。たすくと。伽陀と唱へれば。東西なら。まら。静まら。と
時小見まらくと。泣て二首の歌と詠む。

おのゝ為をふとあとの山をれば。御名と唱ふる人と流るや
千早振玉のしとれと巻上げて。弥陀の御法と聞しものさや

斯と云く我は是五百塵點久成の如來。和光の化義と海水小やぐ。三千世界の能
化の主八相成道の光と。敵岳の麓小朗りて。年久しく。我山の佛法と守護する
ゆゑ。不法宿権現と称る。自ら當山へ住る。故小白山熊野の権現も當山小あじ
ゆゑ。俱小圓頭の教法と守護したまふ。彌陀藥師一躰小して。吾山と守らる

法のらん御うけとらると山本小聖きく。住しを思ふ

と打詠し首とて。後向きて。泣居る。時小老僧も中筋と面々小落涙し。是と限
く。見えらる。叔當山の訃詔あり。源空左邊の御恨めて。候ひらる。急速
小奏聞と經る。召歸れば。尤神慮小付く。候や。やく。納受と岳本のどと
我山と守護し。わら。せと。數遍の陀羅尼と満れば。権現ハ。う。せ。たま。ひ。ける
同日後夜の鐘小僉議して。源空左邊の御恨めて。候ひらる。奏聞兩度小及びらる
折る。南都兵福寺小。春日山の鹿群り。来つて。興福寺中の坊舎と。角と。つて。破
脚と。と。鴨と。れば。衆徒等。大に。恐怖し。則春日四所明神小神樂と。奏。奉。り
神慮と。伺ふ。と。ろ。ふ。巫女小託して。宜く。我は。是。平等。大悲。如來。濁世。末代。の。導師
かれと。假小神と。現し。衆生小結縁も。あ。ら。る。小。此。項。絶て。濟度。の。般と。失。ひ
化益の掉と。流。ら。る。急。だ。尋。ね。求。る。元。の。ど。と。候。せ。と。高。々。と。叫。ぶ。衆。徒。散。馬。り
ま。て。ハ。源。空。と。噉。訃。して。流。罪。ヤ。ら。る。御。怒。り。す。る。べ。し。と。一。同。小。慚。愧。し。る。急。ぎ

都下走登る。流刑息免の義と歎願と。南都北嶺も不斯の願ひなれば。原
 來朕が慮慮ふあはれ。汝等が奏乱ふ依くらうと。則ち勅免の論目と下る。
 勅使ふ初泉の判官阿部近本。八月二日。京と立て同十八日讚岐國お著し
 源空上人の菴室に趣き勅宣の次第を。びふ人々りの御状等と達も。上人は
 かく御請と申させの。勅使同廿五日上洛あり。上人は九月廿五日讚州と御
 参り。十月四日小兵庫お著り。同十日小勝尾寺へ御入あり。百箇日御参
 籠り。當寺の善中禪策勝尾寺の開基也の古跡あり。勝如上人往生の地
 として。此を越年し。翌年兼元五年國中の聖道僧俗等。ころろく止ら
 言とやぶ。つれも利益あり。正月四日。四帖の疏の御談義あり。其
 年も暮年ふ及ぶ。上人當寺ふ一切經の所藏あり。歎く思ひ。菴室上人
 より御相傳の一切經と取下し。當寺に施入し奉り。聖覚法印と目
 御供粮あり時。小重りて論旨と下さる。上人急速小勝尾寺と御出立

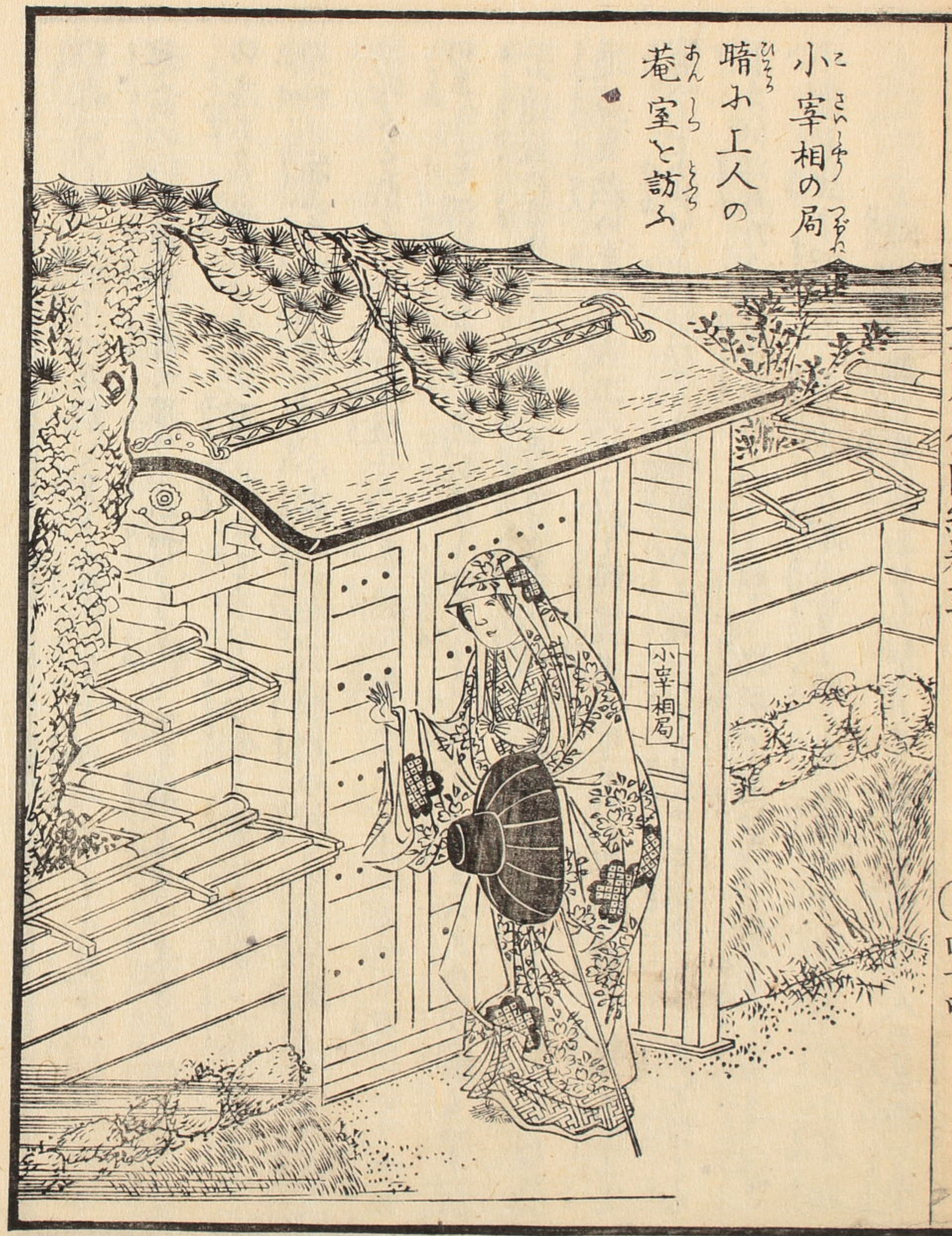
あり兼元と改元あり。建曆元年と号し。十一月廿日小御入洛あり。御在所の
 大谷の御本房より。前大僧正慈圓勅と奉り。御房と修覆したまふ。
 上人とて。今日と聞えられ。山寄赤河原鳥羽の作道まで参向ふ。其數と
 あり。車馬と飛し思ひくの御迎ひ。上人と見まはせ。輿車より轉
 落おろく。十念と受まはせ。御輿の轅に取つ。歡びの流さるる
 七條と東へ御通しあり。貴賤武士道俗男女群集して。大谷の御房まで更も透間
 あり。同廿三日故月輪殿兼實公兼元元年四月九日薨去御年
六十九或は五月五日御年八十七と御柱生也の北の政所。同大納
 言殿より。大谷小御参りあり。故殿下上人配所へ御入り。後日夜朝暮
 小悲歎し座し。其愁傷の積り。御所旁より。終小御命終あり。と語
 りて。今更らう。小歎はる。上人を公御存命を。見参り入配所の物
 ころり。言てん。坐し落涙し。御弟子達も。各墨洟の袖と浸され。る。
 去程。同十二月六日權中納言光親御と奉行し。御参内あり。仰出さる

りんげの七日御参内あり今更御つづく貴き御氣色あり。是は更て神寄り
しりて種々の御奇特ありしと。兩委使披露ありし事殿すぞおの聞え有る
ようてをり。上人御参内の後御飯浴といひ。歳末の御まひといひ。上下万民時尅
々市より御弟子達へ面々縁ふりて他行せよ就中勢親房といふ
長病を配所の御供申す。近日より快氣せよふまうせ。勝尾寺まで御迎ひ
参りしより。殊更何事も勢親と仰せありし。勢親房の由。かくて御弟子達より
諸方より参り集りて。大谷あて越年せしむる。明年建曆二年正月元且法蓮
房道場莊嚴して年始の御念佛。勤行ありし。言上りるされども上人御入堂
もまうしより。善惠房参り。御念佛の時尅とせしむる。惟を申せば。源空ハ風氣
の心地より各勤りしと仰り。仰ふより朝の念佛勤行し早んぬ。法蓮房参りて
見なせられし。御寢をさし給ふ。御心地と問参りし。心持例をい
今日より七日別時有べしと仰り。起居とすたまらば。その後ハ高聲念佛

五躰を責て三日三夜より。儲各小對て宣す。源空を命りて。一月二月も
延べし。頭て御眼と塞。念佛と止て三日より。善惠房参りて上人と
伺ひたて手取り御臨終佛の阿弥陀の像と拜ませり。やと言せば上人御おびて
空よりいひて彼佛の外小佛のおぼしむる。や観音勢至の看病人の如く。源空
傍と去たまらぬより。汝らハ拜ひやと仰りし。不思議なれ。儲老僧達一人
はく。まうし小念佛とせし。仰りれば面々御前とまひ守りて。斯より。程小上人
御往生の檢見と。權中納言光親。左大辨國實。兩勅使あて大谷よりいひ
御逗留あり。廿日の未の刻より御房の上小紫雲とれ覆ひ。廿四日の酉の刻より
御念佛とせしより。暫くして睡眠のゆへ。いつら夜とあけ。廿五日の己の
刻よりし。上人御目とみ。四方へ御覽ありて。あれ障子とれと仰りし。く
みより客殿の間の障子と。内より兩勅使と始りて。宇都宮。成田。大厩。別府。佐々
木の人人列座より。上人御念佛とせし。如何や。年久しと仰りし。御飯浴



法然



小宰相の局
暗い工人の
菴室と訪ふ

小宰相局

るり各その時の子と源空子と申す。斯る濡衣と著て艱育をりし
 子と彼勢觀法師と仰せ。都より参らせり。文又ハ明日討まらん
 とその今日生田の森より進ん。文死骸不附。一札二親の骨の蓋
 不銘と書附たると勢觀不給。勢觀それとて。胸少めて。心
 愁歎。をり。わつた。悲。哉。有為の里。父。と。名。の。残。ま。り。白。骨。を。り。母。と
 見。其。級。を。り。哀。れ。哉。南。洋。の。界。白。骨。の。止。ま。り。其。貌。を。り。分。段。生
 死。を。り。父。子。の。思。愛。と。隔。ら。ん。と。唯。今。の。夏。の。や。う。ふ。け。た。ま。す。バ。見。園。の
 人々袂と絞ると哀傷の涙押がとて見えたり
 さるる己の太鼓を打られれば紫雲の御房の上より垂覆ひ。金色の光明の目映
 して輝き異香の御房の中より薫ると時上人仰々。師より弟子と成
 多生の契と思のり。徳の宿生のか。生夢の中の對面。只今有限
 生歎の思愛のや極めの報土魚上の再會と期ま。宣。法。蓮。袈

袈参らせよと召さる。慈覺大師より御相傳の九條の袈裟と進ら。御手づ
 う引のめい高聲ふ。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と唱。北枕西向
 ふり。念。佛。九。遍。ふ。一。返。の。南。无。の。御。聲。の。下。を。御。息。絶。せ。な。す。ひ
 余後御層の動れたま。十余返。善。惠。房。涙。と。の。い。申。ら。る。は。
 上人の御化導の輩と十念と授け。佛の本願と乃至十念と
 説善導と十聲と釋。上人御存日。源空が往生の末代の念佛者の
 手本と仰。今一返候。御不足の候。今一遍御念
 佛。御弟子。御弟。子。不。聞。せ。り。と。法。蓮。房。南。无。阿。弥。陀。佛。と。一。遍。を。り。奇。特。を。り
 奉。ま。り。遙。不。紫。雲。の。上。南。无。阿。弥。陀。佛。と。一。遍。を。り。た。ま。す。奇。特。を。り
 往生。建。曆。二。年。壬。申。正。月。廿。五。日。午。の。正。中。春。秋。八。十。歳。の。往。生。あり。されば
 受。學。相。承。の。御。弟。子。或。ハ。他。宗。飯。伏。の。御。弟。子。信。心。堅。固。の。念。佛。の。弟。子。結
 縁。聞。法。の。類。ひ。ふ。り。悲。の。涙。胸。を。焦。久。所。謂。佛。圓。寂。入。な。す。時。ハ

空と飛鳥と翼とて御棺の前より落地とて。膝と屈して涙を流し吹風枝と鳴る草木色と變じ江河とをれと止りて登地の菩薩も魚生の觀智と失ひ證果の羅漢も漏盡の袂と絞るなすひた无身解脱の侍弟子と無常轉變の好と悲しむる所理なり况や末世の愚侶於とや生死出離の善知識とて奉記。別離のうらみ禁じがたき。既小暮時おひひれば。諸有とてふあはね上人と入棺し奉記一同小念佛數百返とて。廻向と終つて後御葬の儀式評議せらる。則ち釋尊の御茶毘の如く成入と定めらる。此由法蓮房お申しれば法蓮とて言ひ。十二歳上人廿四歳の御とて。香とて師弟の契とて奉記。已未朝多信空とて。極熱の空ふの扇とて。御前より。極寒の冬の夜の衾と重りて御前。小参る。經論とて。ひいて。鷓鴣の囀とて。疏とて。伽陵頻の御声とて。斯の如きの御とて。一年二年の好とて。五十余年の年序とて。かやの御名残小

いとう无念小火葬し奉記。忽小白骨と成奉らん。あまうく敢て。覺候ふと歎く。面々法蓮房の御義小同以て。土葬の義式小定り。明れ廿六日。御葬所ハ大谷の上の山。青石のある所と定められ石と拾ひ土と築き。僧正。慈圓とれと見ゆ。青蓮華の生とて。石をりて。奇特の思ひとて。程小内禳の檢見の勅使とて。御往生の容子と奏聞と未嘗有の御往生なりと。御弟子の中へ論旨とて下さる。土御門院より上人御往生の葬の御絹水引以下の為小唐綾十匹白布三十端。近衛の藏人等とて。送りせり。同廿七日の午剋の御葬。御棺ハ御枕の法蓮房。御後とて。善惠房惣じて配所の御供十二人の僧侶。御棺の左右お附。其外の御弟子達結縁の老若勝て討へ。同音小念佛して御葬時より埋奉り。畢ぬ上人。羨て仰られり。我往生釋尊の如く。仰出されられば。御弟子。ホ言く。端座合掌して候ふ。と申られ。此一笑とて。我娑婆

宿まゝの浄土の徑路と云ふらんたゞなり。源空端座合掌せば。人々定めて是とす。若失念のそとに。まづ心と扱ひて。名号を本ととくべ。穢身端座ふりて。唯念佛往生を。釋尊御入滅の儀いづれとせむべと。頭北面西右脇ふし。御往生と遂にせたまひ。おんぬ叔中陰の間。各退散とて。精誠とて。報恩と謝したまふ。實有がごとく。事ごとくなり。

一書云上人の住房の東の岸の上。西暗なる勝地あり。或人これと相せ。自身の墓所よとて。定め置ると。上人都ふ飯らせめ。後去十二月かの持。至上人ふ寄進。券契帖ホある。寄進状相とて。奉りければ。源空お譲り。是三寶ふ回向せ。也佛請ふ。火中ふ投入られぬ。然ふ今上人往生して。此地ふ廟堂を。石の唐櫃とわす。納奉ると。歩くと運ぶ。忘月とて。貴賤市とす。忘日とて。工下袖とす。

三

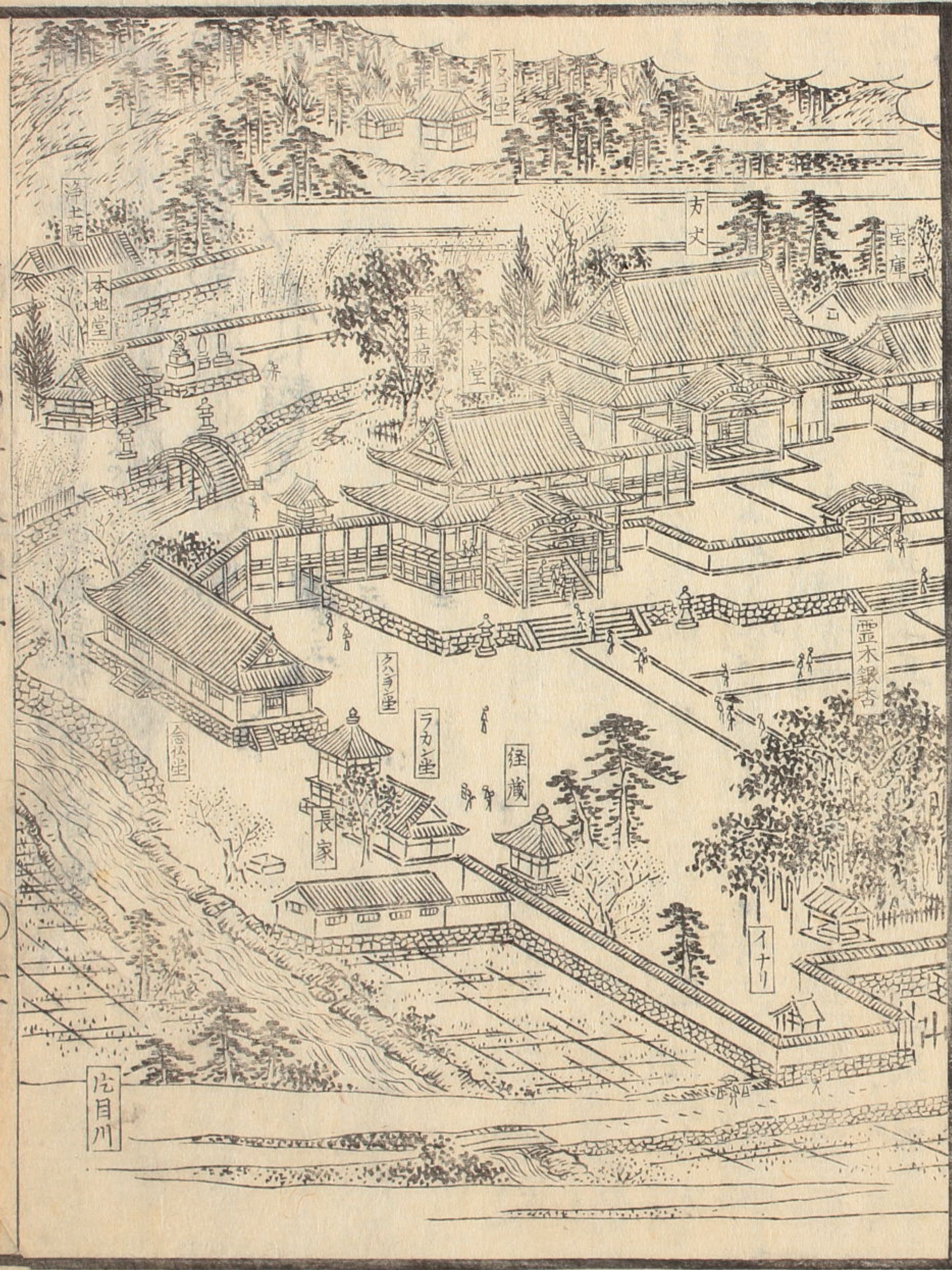
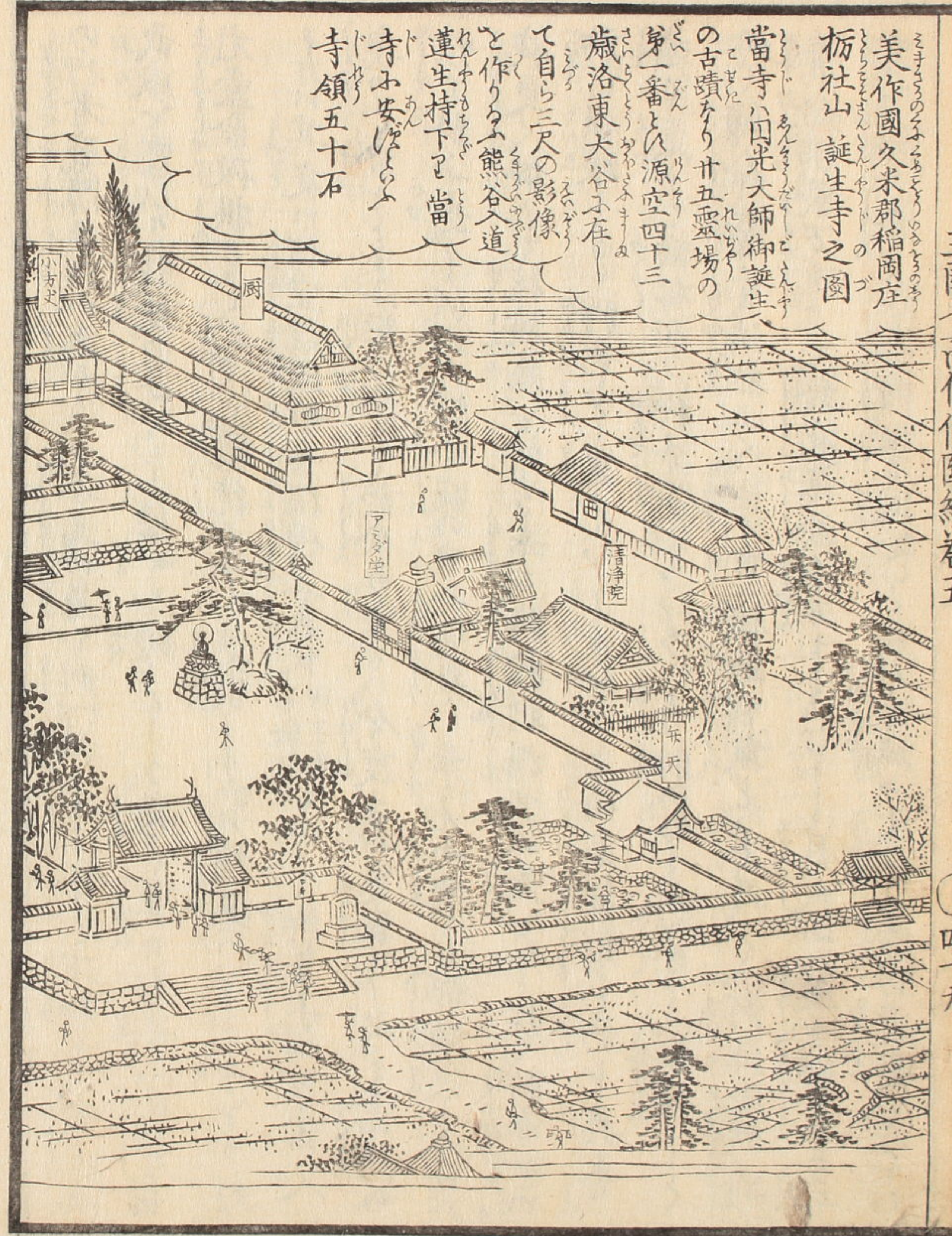
ら。當時知恩院とす。是なりとす。

源空上人滅後十五年。ふ相ある嘉祿二年丙戌の春。一の不思議出来。その故の上野國より。叡山ふ登り。習學者ふ。波畫の堅者。定照とて。僧有深く上人の念佛弘通とて。選擇集を破る。文と作。彈選擇とて。け源空の弟子習學者多し。本天台宗の學者。今ハ師匠のあとと。學ぶ。一宗と真行と。一流の通とある者。隆寛律師の詩。送らと。律師と見。先師の素意と。顯る。汝の體破。的なる。文と作。定照が難波と。其肝文。汝の體破。的なる。した。暗天の飛礫の。嘲書。定照の憤。同年の夏。衆徒相。ひ天下。一向ふ浄土門。頭密の教法。既ふ。依て念佛と。就中隆寛。我山の學者。て。圓宗の教法と。念佛專修と。張本と遠流と。先

その根本源空が大谷の墳墓と破却して彼遺骸を加茂川白川に蹴りよそ
 強々の群義少あり。若子匠とて俱多小同とて一心袖水と服。當山了
 閑とて奏聞まへさし治定して貫主申し其時閑白の家實猪熊殿
 山門の座主淨土寺の僧正圓基に攝政殿の御兄たり内外も強縁あり
 衆徒濫訴小勅許あり六月廿三日所司專當ホと數百人はくす。あふ
 京都の守護職六波羅の北條修理亮平時使使者として東大隅入道親子
 五人内藤五郎女衛尉盛政父子十五騎あり向ふ洛中邊土耳目と驚りし
 人々駭ぎあり使者云左右より狼籍とてと甚以所謂を。縦令子
 細ありとて天聽と驚馬うたてまつり。別して將軍家と措くの條奇怪あり
 亦勅許ありと武家方兼く其沙汰と經へ。面々問答ありと是非
 なく凶徒等廟堂と破り房舎と毀られば止と得と定らく山門乃
 者として聞ありつん善惡不二邪正一如の所理。関東の徒予苗の家と嗣西方

の行者魔障退治の為なりと各馬の鼻と列べ法あまをせと下知して散々小
 武威と震ひければ蜘蛛の子とらひごとく如く逃るる。斯く其日も暮ふ及び
 尤堂舎破損とて之と惡徒とて退散しければ墳墓のやど手とけ
 れば其夜の信空證空妙香院僧正良快月輪殿の御弟子二百余人
 畏つて涙とて小警言固として詮合ありる。今度まづ退散とて山門の
 憤り終ふ止むべ。あはれ今夜の中改葬し奉らん小如と評議決りければ
 夜更人静とて後墳墓とて御棺朽損せし蓋とて拜奉る。聊の損壞とて御色少く思ひとて御袈裟衣と朽と異香
 遠く薫とて馥郁なり。御弟子とらひ奇特のありとて敬禮とて
 云く歸命誓首法然上人生々世々值遇頂戴とて阿弥陀經同
 音念佛數万返とて終夜落涙千万あり。むし月氏ふい教主釋尊の尊
 容と盜と奉らん時敬言固とて今日城本師上人の遺骸とて

美作國久米郡稻岡庄
枳社山 誕生寺之圖
當寺ハ因光大師御誕生
の古蹟ナリ廿五靈場の
第一番とい源空四十三
歳洛東大谷ニ在
て自ら三尺の影像
と作りし熊谷入道
蓮生持下ニ當
寺ハ安部氏ノ
寺領五十石



奉らん火難うたふしと非どとて宇都宮弥三郎入道蓮生房鹽屋入道信生房
千葉六郎太夫法阿房。渋谷七郎入道。道通房。頼宮兵衛入道。西佛房の
輩いづも甲曹と著し兵具と帶し軍兵と卒し参向し御棺と守護し
嵯峨二尊院へ渡り奉る。然る小尚山門より捜て求るより風聞せしむ。
同廿八日の夜忍びて太素廣隆寺の来迎房圓信或ハ圓空の許し置奉り。在所
と口外まが守と各佛前ふ誓ひて退散し畢ぬ。

卅四

嘉祿二年十二月廿八日改元ありて安貞元年と云。同二年正月廿九日の暁天
上人の御遺骸と廣隆寺より西山粟生野幸阿弥陀佛房今光明が寺と号す許
し渡り遺第一所小来會して茶毗し奉る。是れ小紫雲空満吳香丸も
甚し。御遺骨と御ひ寶瓶ふおささ幸阿弥陀佛預けと各退散し
より余後正信房の沙汰して彼芳骨と納り奉らん為ふ。二尊院の西の岸
の上ふ塔と建て。貞永二年正月廿五日正信房御骨をゆき小粟生野小至る

小幸阿弥陀佛の御骨と菴室の土藏小深藏を鎮西小下より。鍵と
奪り小土藏と開く。なる由堅く誠りてとて鎰を預け置さるる
留主の僧とてりりあさる。大に驚き相伴門第二十八人面々ふ力と益
て推して戸と開くとさるふ叶ふ。空しく歸るんとも。此時御在世さる
湛空が歸りしと申入んふ見参入て空しく啼ぶ泣く泣く
口説きとれりる小土藏樞鳴すふ覚えたれば。門弟の中小信覚とる
僧小戸を引き見し。正信房の指圖おるふ信覚をりてカと同ふ
何の更き明しりの歎申と趣と聞き入られる事をと。歡びの涙と
流し。御骨と出して塔の中小納り奉る。抑元祖源空上人一代の化導
諸傳小戴く其徳義勝て討くべし。今略してふ二と奉るけも。
原より阿弥陀如来の智慧と主とるふ大勢至菩薩の化身なりが故也。
御臨終迫りしに御弟子達小對ひ我は是安養久住の人いぬハ

彼土（つど）還（かへ）飯（い）と云（い）ふ尤（なほ）天竺（てんじく）釋尊（しやくそん）の在世（ざいせい）の頭陀（つど）弟一（ていいつ）の摩訶（まか）迦葉（かえつ）尊者（そんじや）と現（あら）きたまひ釋尊（しやくそん）の化導（けだう）と助（たす）けり。唐土（たうど）の善導（ぜんだう）大師（だいし）とあられり。諸師（しよし）の謬（あやま）と改（あら）り。古今（こきん）と指（さし）定（ぢやう）して念佛（ねんぶつ）と弘通（くわうつう）。今（いま）又（また）粟散（ぼくさん）。元洲（げんしゆ）の此（こゝ）日本（にっぽん）より源空（げんくう）上人（じやうじん）と現（あら）じたまふ。程（ほど）八家（はつか）九宗（くじゆう）の其中（そのちゆう）にて。大原（おほはら）勝林（しやうりん）院（いん）立（た）禪（ぜん）寺（じ）して六宗（りくしゆう）の達者（たつしや）と問答（もんたう）往復（わうふく）ありて。終（つひ）に聖道（せいだう）諸宗（しよしゆう）の外（ほか）に淨土（じやうど）一門（いつもん）と創建（くわんけん）あり。天（てん）四海（しやうがい）無比（むひ）類（るい）なり。淨土（じやうど）の真門（しんもん）。他（ほか）力（りき）往生（わうじやう）の一路（いちろ）と聞（き）き。然（しか）し其流（そのりゆう）と汲（く）み。其法（そのほう）水（すい）と吞（の）み。誰（たれ）此大恩（このおほい）と頂（たう）ま。奉（ほう）らるる深（ふか）く教導（くわうたう）の高恩（こうおん）とあり。其恩（そのおん）と報（はう）ぜん。信（しん）為（ゐ）能入（のうにゅう）の金言（きんげん）と守（まも）り。一向（いけう）專念（せんねん）の指南（しゆばん）と仰（おほ）ぎ。行住（ぎやうじゆ）座卧（ざわ）小称（せうしやう）名念佛（なねんぶつ）して元祖（げんそ）の御跡（ごせき）と志（し）す。眞實（しんじつ）の報土（はうど）の往生（わうじやう）と遂（つひ）に是（こゝ）と試（たま）し。報恩（はうおん）の最上（さいじやう）なるべし。賢（けん）く緩（ゆる）がせよ。元祿（げんろく）十年（じゆんねん）勅贈（ちやくぞう）あり。圓光（えんくわう）大師（だいし）と号（ごう）し。尔後（このち）寶永（ほうえい）八年（はちねん）東漸（とうせん）の二字（にじ）と加（か）へり。尚年（しやうねん）と重（おも）りて。追號（おひごう）ありて。圓光（えんくわう）

東漸（とうせん）惠定（ゑいぢやう）弘覺（くわうかく）大師（だいし）と稱（なづ）け奉（ほう）る仰（おほ）ぎ尊（そん）ぶ

三國（さんこく）七高僧（しちかうそう）傳（でん）本朝（ほんてう）之（の）卷末（まゝ）大尾（おほび）

三國志後傳傳國繪卷五
東漢書
大原書林
五十二

